第四編　先史時代

第一章　旧石器時代

第一節　氷河時代の地球

地球は、約四六億年前に生成されたとされている。私たち人類の直接の祖先はアウストラロピテクスとよばれているが、地球上に現れたのは、今から約五〇〇万年前の地質学でいう第三紀の終わりごろのことである。

第三紀につづく第四紀の更新世（洪積世）は氷河時代ともいわれ、寒冷な氷期と比較的温暖な間氷期とが交互におとずれ、そのたびに海面の上昇と下降が繰り返されている。

第四紀は約二〇〇万年前に始まり、氷河時代で代表される洪積世と、約一万年前に始まる氷河時代以後の沖積世とから成っている。洪積世には、ギュンツ氷期、ミンデル氷期、リス氷期、ヴュルム氷期などと呼ばれる、気候が寒冷で乾燥した氷期と、リス間氷期・ヴュルム間氷期などと呼ばれる温暖な間氷期が繰り返されていた。

そして約二万年前の氷河時代最後のヴュルム氷期の最盛期には、地球全体の気温が低下し、現在よりも年平均で七～八度低く、地球上の水の多くは凍り、海水の量が減ったため、海水面は現在よりも一四〇メートル前後低かったとされている。

1　人類の出現

人間の歴史は人類の出現とともに始まった。「人の祖先は猿の仲間」から進化したといわれている。二本の足で歩く、最初のヒト科動物が猿人である。

人類は、猿人→原人→旧人→新人と進化し現代にいたっている。

霊長類のうち、直立して歩き、道具を使った最初の人類は、東アフリカ地方の遺跡から発見された猿人で、彼らは自然石の一端を打ち欠いた石器（礫器）を使用したことが知られている。

一五〇万年位前の、かなり進化したアウストラロピテクスは完全な直立歩行の姿勢をとるようになり、さらにすぐれた石器文化を発展させている。アウストラロピテクスに続いて発見される人類の祖先は、五〇万年くらい前の原人である。中国のシナントロプス（＝北京原人）やインドネシアのピテカントロプスがその代表である。

原人の段階になると石器や骨角器を用いて共同で狩猟を行うようになり、火も使用していたことが知られている。一五万年ほど前の旧人のネアンデルタール人になると、直立二足歩行は完成し、身体つきは現代人とほとんど変わらなくなったようである。この時代の人々はマンモスなどの大型動物を狩猟し、洞窟や平地の住居などに住んでいたらしい。

現在発見されている人類化石の出土遺跡からみると、猿人はアフリカ地方のみ、原人はヨーロッパ、アジア、ジャワ地方に、新人の段階では南北アメリカ大陸や北欧にまで広がっていて、居住圏が拡大していったようである。

2　日本人の祖先

約二〇〇万年前、日本列島は、現在に近い形の地形になったとされている。私たちの祖先は、海水面が低下した氷期に、現在では絶滅してしまったオオツノジカ、トウヨウゾウ、マンモスゾウ、ナウマンゾウ、野牛などの動物群などと一緒に、大陸と陸続きであった日本列島に渡ってきたのであろう。

目本列島では、石灰岩地帯などで人類の化石が幾つか発見されている。代表的なものに兵庫県明石市西八木海岸で発見された明石旧人がある。以前には、原人（数十万年前）とされていたが、最近の研究で旧人（約九万年前）とする見解が支配的である。

関東地方以北では、後期旧石器時代の人骨は発見されていない。しかし、中国東北部やシベリアと共通する石器群が見つかっている。これらは東アジアの広範囲な地域における人間の交流の結果もたらされたものであり、北方からもわれわれの祖先がやってきた事実を示している。日本人の祖先はいくつかの経路を経て、中国大陸から日本列島へわたってきたことが推定されているが、南九州の人々の祖先はどこからきたのであろうか。その第一候補として、約一万八千年前の港川人（沖縄県）があげられる。

3　南九州の自然環境の変化

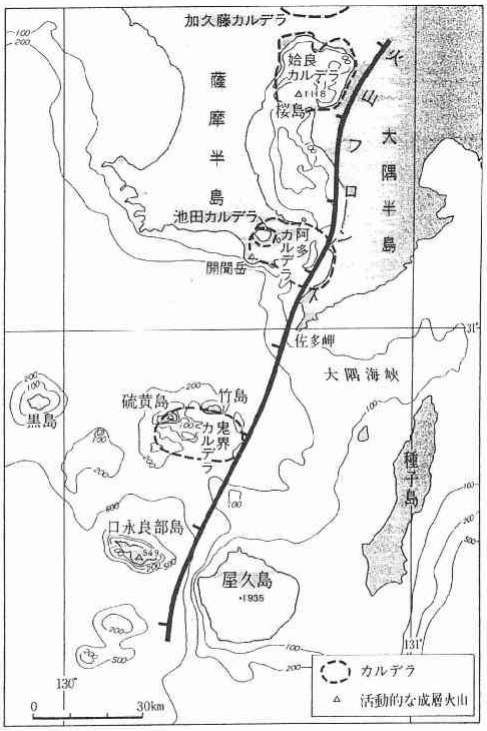
旧石器時代、縄文時代を通して、南九州の自然環境の変化の大きな原因は、気候変化と火山噴火である。

氷河時代（約二〇〇万年間）は、先に述べたように、寒い氷河期と暖かい間氷期を繰り返した時代である。最も新しい氷河期は七万年前から二万年前ごろで、最終氷期と呼ばれている。この最終氷期末の二万年前ごろが最も寒冷な時期であったとされている。

縄文草創期・早期は寒冷な気候から温暖な時期に向かう移行期である。この後、急速な温暖化が進み、現在とほぼ同じ気候になり、氷期が完全に終わるのは、七〇〇〇～六〇〇〇年前である。

ところで、現在の日本列島とその周辺の海峡の水深は、間宮海峡が二〇メートル、宗谷海峡が六〇メートル、津軽海峡・対馬海峡がそれぞれ一四〇メートル、鹿児島県の大隅半島と種子島の間にある大隅海峡が一〇〇メートル位の深さである。

ヴュルム氷期に海水面が現在よりも一四〇メートル低かったとすれば、これらの海峡は陸地であったことになるし、それ以前の氷期でも当然海水面は低下していたことであろう。



第１図　大隅海峡周辺の火山活動（町田洋より）

対馬海峡周辺から黄海にかけての広大な大陸棚も陸化していた可能性が高い。

昭和一二年（一九三七）、岡田嘉子が北海道の宗谷岬から約四〇キロメートルある宗谷海峡の流氷を樺太まで歩いて渡り、ソ連へ亡命したという故事から、対馬海峡が完全な陸続きでなかったとしてもわれわれの祖先が氷原を歩いて渡ることができたと考えてよいであろう。われわれの祖先は、海水面が低下した氷期に、今はもう絶滅してしまったオオツノジカやナウマンゾウ、野牛などの黄土動物群などと一緒に、大陸から渡来したと考えられる。

後期旧石器時代末（約二万年前）の南九州の海岸線は、現在の水深一〇〇メートルの等深線に沿っていたようである。この海域は屋久島東方から種子島・大隅半島にかけての海域にあたり、屋久島と種子島の間は広く陸地となり、種子島と大隅半島とは地峡によって陸続きになっていたことが推定されている。また、鹿児島湾の湾口の海底は最も深いところでも、九五メートルほどであり、薩摩半島と大隅半島は繋がっていた可能性が高い。鹿児島湾は水深一〇〇メートルより深いところが広く分布しているので、当時の鹿児島湾は広い湖であったようである。

最も寒冷化が進んだ二万年前ころの日本列島は大半が針葉樹で覆われていた。寒冷化のピークを過ぎると針葉樹林から次第にナラ類を中心とした落葉広葉樹林に覆われるようになった。

氷河時代の終わりごろ（一万八〇〇〇年前）、ヴュルム氷期の終焉とともに氷河時代も終わりをつげる。地球の気温は徐々に上昇し、それにともなって海水面も上昇しはじめた。

気温の温暖化とともに海水面が上昇し、洪積世から沖積世に移る約一万一〇〇〇年前ごろには、瀬戸内海にも海水が入り込んでくる。それでも水深二〇メートル未満の関門海峡はまだ陸地であって、九州島が本州島と分離するのは縄文時代になってからであろう。

氷河時代の日本列島は激しい気候の変化と地形の変動に伴い、動物の移動や植物相の変遷を繰り返している。長野県野尻湖における調査ではオオツノジカ・ナウマンゾウ・ニホンジカ・ヒグマなどの骨が出土しており、日本列島の植生の大部分は落葉広葉樹・針葉樹林やツンドラの植生であったようである。

第二節　南九州地方の火山活動

後期旧石器時代以降の二つの巨大噴火は大きな環境変化を起こし、地形や動植物、人類に大きな影響を及ぼした。

南九州には、加久藤・小林カルデラ、姶良カルデラ、阿多カルデラ、鬼界カルデラなど直径が二〇キロメートルにも及ぶ巨大カルデラが北から南へ一直線上に分布している。加久藤・小林カルデラは加久藤・小林盆地、姶良カルデラは鹿児島湾奥、阿多カルデラは鹿児島湾央から湾口にかけて、鬼界カルデラは大隅海峡の海底にある。これらの火山は後期旧石器時代以降、爆発的噴火を繰り返してきた。中でも、後期旧石器時代の二万五〇〇〇年前頃に姶良カルデラで起こった入戸火砕流噴火と縄文時代早期末の六五〇〇年前頃に鬼界カルデラで起こった鬼界アカホヤ噴火は第四紀地史上最大級の巨大噴火であった。これらの噴火は、周囲一〇〇キロメートルもの広範囲

に及ぶ大規模な火砕流を生じたことを特徴としている。一九一四（大正三）年に桜島火山が噴火したときの一〇〇倍以上の火山灰・軽石を噴出したとされているが、これらの火山灰は日本列島とその周辺海域に広く見いだされている。

入戸火砕流噴火当時は、最終氷期最盛期にあたり、海面は現海面下一〇〇メートルほどのところにあり、姶良カルデラは湖であった可能性がある。その水底から噴火したものとみられている。この噴火は瞬時にして南九州の地形を大きく変え、広大なシラス台地を形成した。それは、南九州の動植物や人々に壊滅的な打撃を与えたに違いない。

鬼界アカホヤ噴火は、考古編年の上では縄文時代の早期と前期とを分ける指標として位置づけられる。この噴火は、後氷期の温暖期に入る頃で、縄文海進のピークにあたり、海岸線がもっとも内陸に進入したころに起こっている。

第四紀には、氷河が発達と後退を繰り返し、国東・九重・雲仙・阿蘇・霧島などの火山活動も活発に起こっていた。約九～八万年前に阿蘇カルデラから噴出した阿蘇４火山灰（Ａｓｏ４）や、約二万五〇〇〇年前に鹿児島湾北部の姶良カルデラで起った大噴火の火山灰（姶良・丹沢火山灰＝ＡＴ）や、さらに薩摩半島と屋久島の間にある鬼界カルデラから六五〇〇年前に噴出した鬼界アカホヤ火山灰（Ｋ‐Ａｈ）などは、我が国最大規模のもので、上空の偏西風にも乗って日本列島のほぼ全域に火山灰を降下させている。これらの広域火山灰（姶良・丹沢火山灰＝ＡＴと鬼界アカホヤ火山灰＝Ｋ‐Ａｈ）は、放射性炭素（Ｃ14）による年代測定で年代もはっきりしているため、相対年代や地域間の比較に重要な役割を果たしている。これらの火山灰層の上位から出土したものは、下位から出土したものよりも新しいというように、旧石器時代・縄文時代の新旧の年代を決める「鍵層」となっている。

１　姶良カルデラ

姶良カルデラは南北二三キロメートル、東西二四キロメートルの陥没カルデラで、現在の桜島を南端とする鹿児島湾北部に位置する。約二万五〇〇〇年前に起こった大噴火は我が国最大規模のもので、北は東北地方から南は沖永良部島におよぶ直径約二千数百キロメートルの範囲に火山灰が降下している。

南九州で通称シラスと呼んでいるものは、火口から噴出した熱雲が陸上を流れて堆積したものをいい、空中高く吹き上げられ偏西風に乗ってはるか遠くまで飛んでいったものを姶良火山灰と呼んでいる。旧石器時代の新・旧を確認する上で重要な手がかりを与えてくれる火山灰層である。

２　薩摩火山灰

南九州にはアカホヤ火山灰層の下位に縄文時代早期の文化層をはさんでもう一枚の火山灰層が存在する。この火山灰層は、姶良カルデラ内で現在も活動をつづけている桜島が約一万一五〇〇年前に噴出した桜島起源の火山灰堆積層で薩摩火山灰と命名されている。

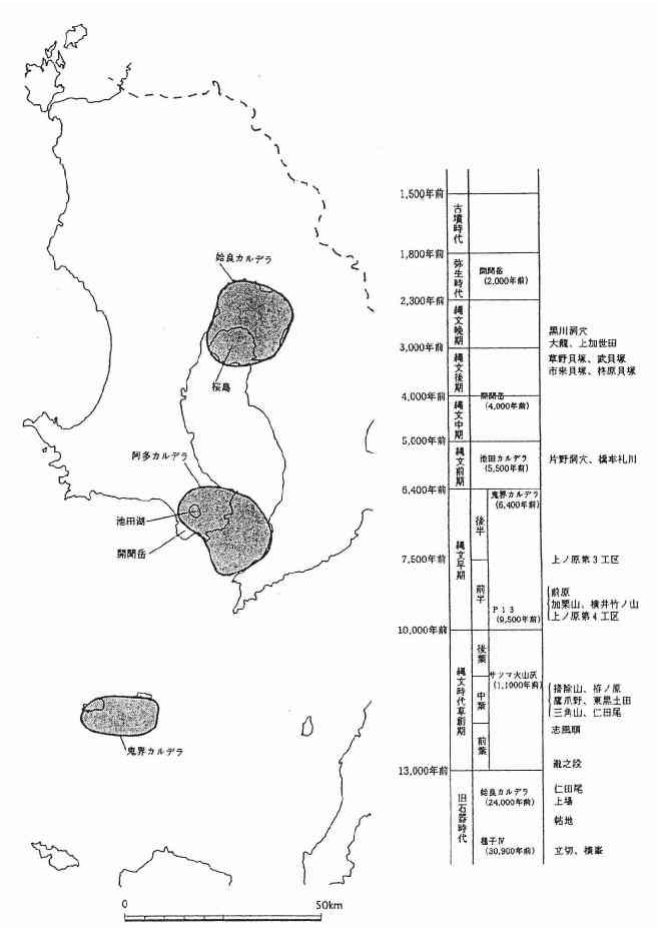
薩摩火山灰の降灰範囲は南九州のごく限られた地域に限定されているが、旧石器時代から縄文時代への過渡期の文化（すなわち縄文草創期の文化）を確認する上で重要な手がかりを与えてくれる火山灰層である。

3　鬼界カルデラ

鬼界カルデラは薩摩半島の南方、屋久島の北方洋上に浮かぶ硫黄島から竹島にかけての海底に存在する南北約一六キロメートル、東西約二三キロメートルのカルデラである。

このカルデラから噴出した火山灰はアカホヤ火山灰と呼ばれ、姶良カルデラの火山灰と同じように偏西風に乗って西日本全域に広がっている。鬼界カルデラの火山灰（アカホヤ火山灰層）は、約六五〇〇年前のもっとも気候の暖かかったときに降下したものである。

アカホヤ火山灰層の直上から出土した縄文式土器は縄文時代前期（六〇〇〇～五〇〇〇年前）に、アカホヤ火山灰層の直下から出土した縄文式土器は縄文時代早期（一万～六〇〇〇年前）に位置付けられている。



第２図　火山灰と編年

第三節　旧石器時代の概観

1　旧石器時代

氷河時代は人類が進化した重要な時期でもある。人類が最初に道具として利用したものは、主に黒曜石や頁岩、チャート、サヌカイトなど堅くて鋭い刃のできる「石」であった。

焼き物を焼く技術がまだなかったこの時代は、石はさまざまに加工され、使用されていた。人類は石を打ち欠いて作ったナイフや槍先などの打製石器を使用し、狩猟・漁撈・採集などの生活を営んだが、とくに完新世（沖積世）では絶滅してしまったナウマンゾウやオオツノジカなどの大形哺乳動物を狩猟

の対象とした。考古学ではこの段階を旧石器時代とよんでいる。

人類の歴史のなかで、道具として金属を使わずに、石器を使用していた時代を石器時代とよび、さらに、石を打ち欠いて作った打製石器だけが使用された旧石器時代と、打ち欠いた石を磨いた磨製石器を使用するようになった新石器時代とに区分している。猿人から原人をへて、旧人、さらに新人にいたる時代は、旧石器時代にあたる。なお、旧石器時代の時期区分は、猿人・原人の段階（一三万年位前まで）を前期旧石器時代、約一三万年前～三万年位前までの旧人の段階を中期旧石器時代、約三万年前から一万三〇〇〇年位前までの新人の段階を後期旧石器時代としているが、日本では中期旧石器文化は明確にされておらず、約三万年前より以前の旧石器文化は一括して前期旧石器文化とする説もある。

2　九州の旧石器時代

昭和二四年（一九四九）、群馬県岩宿遺跡の関東ローム層の中から打製石器が確認されたのをきっかけに、北は北海道から南は沖縄に至るまで全国各地で、旧石器時代の人々の生活の様子が知られるようになった。

石器は、はじめ形が一定しない剥片などを利用した石器が用いられたが、しだいに器種や加工法が定型化してナイフ形石器などが現れ、その後に刺突用の尖頭器など用途に応じて分化した道具が作られるようになった。また、この時代の末期には、尖頭器の一種としての石槍や細石器（マイクロリス）などの小形の剥片石器が作られ、狩猟方法に大きな進歩をもたらした。

北九州市辻田遺跡、宮崎県川南町後牟田遺跡、長崎県平戸市入口遺跡の打製石器は九～八万年位前の阿蘇４火山灰（Ａｓｏ４）の直上から出土しており、現時点では、九州最古の旧石器であるとされている。

九州地方の旧石器の編年では、姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）降下期（約二万五〇〇〇年前）までは不定形な石器やナイフ形石器、台形石器を中心とする石器組成であり、ＡＴ降下期前後にはナイフ形石器、剥片尖頭器、三稜尖頭器、台形石器、彫器、石錐を中心とする石器組成である。この時期には横剥ぎ剥片で作る瀬戸内技法の存在も知られている。その次の段階には台形石器に変化が見られるようになり、一万四〇〇〇年前ごろから細石刃、細石刃核が中心となる。

近年、南九州西回り自動車道鹿児島道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査、中山間地域総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査、県営圃場事業に伴う埋蔵文化財発掘調査、都市公園整備に伴う発掘調査などがおこなわれ、郡山町周辺の鹿児島市・伊集院町・松元町などでは旧石器時代、縄文時代草創期の様相が明らかにされつつある。

郡山町ではこのような開発に伴う発掘調査がほとんど行われておらず、とくに旧石器時代、縄文時代草創期に関する様相は明らかでない。

ここでは最近の研究成果や鹿児島県立埋蔵文化財センター、各市町村の報告書などに基づいて、南九州の概要を述べ、郡山町内の先史・古代の遺跡については、鹿児島県立埋蔵文化財センターや郡山町教育委員会などの発掘調査成果を踏まえ、ふれていくことにする。

なお、郡山町内の遺跡については、その記述の大部分を郡山町教育委員会発行の報告書に従っている。

3　南九州の旧石器時代

南九州の旧石器時代の遺跡はどこまでさかのぼれるのであろうか。昭和四〇年（一九六五）、出水市上場遺跡で本県初の旧石器時代遺跡が確認された。

現在では、鹿児島県内の旧石器時代の遺跡及び石器出土地は、県本土ばかりではなく、離島の種子島や奄美大島などでも発見されており、一〇〇ヶ所以上が確認されている。

一九七〇年代からはじまった、九州縦貫自動車道や開発関係の発掘調査によって、多くの貴重な遺跡が消滅していったが、その代償として旧石器時代から中世にいたる膨大な資料、年代決定の鍵層となる火山灰層の把握、さらに土器型式と層位関係などの成果が得られた。

旧石器時代の時期を識別する鍵層として重要なものに、先に述べた姶良・丹沢火山灰（約二万五〇〇〇年前）がある。姶良シラスとも呼ばれている姶良・丹沢火山灰は、噴出源に近い鹿児島湾周辺では、数一〇メートルから一〇〇メートル以上堆積しているために、三万年以前の古い遺跡の発見は困難を究めている。

二万年以上前の鹿児島県内の主な遺跡をあげると、県本土では出水市上場遺跡、枕崎市二本木遺跡、日置郡松元町前山遺跡・仁田尾遺跡、揖宿郡喜入町帖地遺跡、指宿市水迫遺跡、鹿児島市加栗山遺跡などをあげることができる。

離島では徳之島の天城遺跡・ガラ竿遺跡、奄美大島本島の笠利町土浜ヤーヤ遺跡・笠利町喜子川遺跡、種子島の南種子町横峯C遺跡・中種子町立切遺跡などがあげられる。

目本列島旧石器文化の南方への広がりは、これまで九州本島にとどまっていたが、種子島の横峯C遺跡や立切遺跡から、姶良カルデラの火山灰層（二万五〇〇〇年前）の下層から礫群が検出され、放射性炭素年代で三万年を超える数値が確認された。約三万一〇〇〇年前の礫群（石蒸し料理遺構）は、これまで確認された旧石器時代の礫群としては日本列島最南端に位置し、現時点では国内最古のものとされている。

笠利町土浜ヤーヤ遺跡は、奄美諸島最初の旧石器時代遺跡の発見として注目される。第Ⅲb層から頁岩製の削器や剥片が、第Ⅲc層からは磨製石器と推定される研磨痕のある石器を含めて、計三四点が検出されている。放射性炭素による年代測定の結果、Ⅲb層は一八六八〇±二三〇Y・B・P、Ⅲc層は二一四〇〇～∞Y・B・Pの年代が得られている。

奄美大島の喜子川遺跡（約二万五〇〇〇年前）と徳之島のガラ竿遺跡（約三万年前）からも旧石器時代の石器類が出土している。

これらの遺跡の発見は、目本人の祖先がどこから来たのか。日本文化形成期に沖縄や奄美諸島を含む「南方ルート」があったのかどうかということを考える上で注目される。

県内の旧石器時代の遺物は、ほとんどが茶褐色粘土層（通称チョコ層）から出土しており、その年代はシラス（約二万五〇〇〇年前）

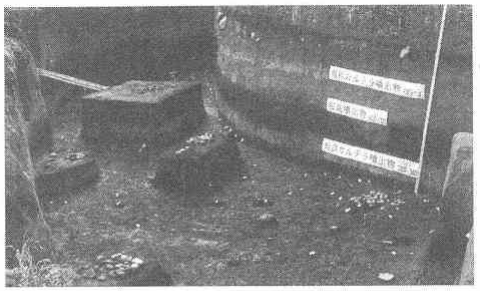
以後から薩摩火山灰（約一万一五〇〇年前）までの大きな年代幅があり、チョコ層の細分化が今後の課題となっている。姶良カルデラ（約二万五〇〇〇年前）、桜島（薩摩火山灰＝約一万一五〇〇年前）、鬼界カルデラ（アカホヤ火山灰＝約六五〇〇年前）などの火山灰層に覆われた状態で当時の生活の跡が発見されるため、これらの火山灰層は編年を行なう上で、重要な鍵層となっている。

とくに、薩摩火山灰の降灰範囲は南九州のごく限られた地域であるが、この火山灰が南九州の旧石器時代と縄文時代の編年にとって重要な鍵層となっている。

南九州の場合、旧石器時代包含層は薩摩火山灰層の下に存在し、その上の縄文時代とは明確に区別できる利点がある。この薩摩火山灰層より下の層からは、ナイフ形石器、細石器、細石器と土器、細石器と石鏃、土器と石鏃、石斧といったさまざまな組合せの出土状況が確認されている。

すなわち、薩摩火山灰層の下の層において、旧石器時代から縄文時代草創期の移行が行なわれていることが明らかにされたのである。

当時の人びとは洞穴や岩陰、その他の居住に適した場所を選んで生活を営み、石器を作り、狩りや採集により食糧を得ていた。当時の植生から見て、後期旧石器人はクリ・クルミ・ドングリなどの堅果類種子などを採集し、また、これらの自然の恵みを求めて集まる動物を対象とした狩猟活動も活発であったと考えられるが、自然現象の変化に左右されながら移動の生活を繰り返していたようである。



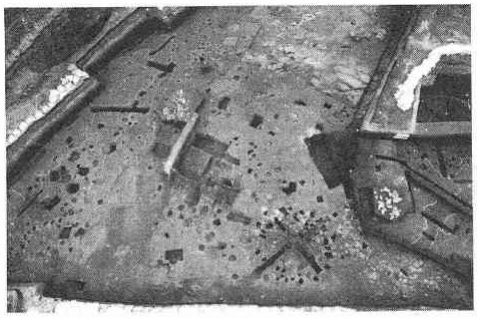
第３図　火山灰土層写真（喜入町帖地遺跡）

4　旧石器時代の集落

旧石器時代の人々は、動物を狩猟しながら、一定の範囲を移動する生活をしていた。そのため、簡単な木の枝を組み合わせた小屋などを住まいにしていたものと考えられている。

鹿児島県出水市上場遺跡では一九六〇年代に、ナイフ形石器・台形石器などを出土する第四層から旧石器時代の竪穴住居跡二基が発掘され、わが国最初の発見とされている。

指宿市水迫遺跡は、標高一二六メートルの舌状の尾根の東南側に位置する。この地域の基盤層である清見岳火山灰層上面で、ナイフ形石器文化終末期から細石刃文化期にかけての約一万五〇〇〇年前の建物跡、炉跡、道跡、杭跡、石器製作場を含めた集落遺構が確認されている。建物跡は、一辺一～二メートル、深さ二〇～三〇センチメートルの楕円もしくは、歪んだ隅丸方形の竪穴が切り合った状況で確認されたもので、周囲には柱穴とみられる小ピットも



第４図　旧石器時代住居跡（指宿市水迫遺跡）

検出されている。建物跡の北側から検出された道跡とされる遺構は、四～六センチメートルの窪みが東西方向に帯状に伸び、途中で二本に枝分かれする。窪みの幅は四〇センチメートル～一メートルである。住居が確認された地点から西側の部分に、石器製作場がある。ここでは細石刃核、細石刃、砕片や、小型のナイフ形石器・台形石器などが出土した。水迫遺跡で発見された遺構群は、移動生活をしていたと考えられる旧石器時代の先駆的な集落として大変重要である。

5　旧石器時代人の精神文化

旧石器時代の人々の精神文化を示す遺物としてヴイーナス像がある。

財部町耳取遺跡は、海抜約二八〇メートルの所にある。シラス直上の地層から、二万四〇〇〇年前の人為的に線刻した日本最古の線刻礫（ビーナス像）が出土している。手足を省略した女性像で、長さ約五センチメートル、幅約四センチメートル、厚さ約二・五センチメートルの大きさである。一三枚の遺物包含層が確認され、繰り返し生活の場となっていたことがわかる。シラス上位XⅦ層と桜島起源のバミスP17を含むXⅥ層において、約九〇基の礫群が検出されており、かなり多くの人々が集団で生活していた様子がうかがえる。ビーナス像が発見されたXⅦ層は剥片尖頭器を主体とする文化層である。剥片尖頭器は朝鮮半島南部から九州にかけて分布する特徴的な石器である。こうした広域に分布する石器が飛び地的に出土していることは、人間集団の動きと関わりがあると思われる。

旧石器時代の線刻礫は、千葉県上引切遺跡などで検出されているだけであり、また、人物像とすれば大分県岩戸遺跡の石偶の発見以来である。

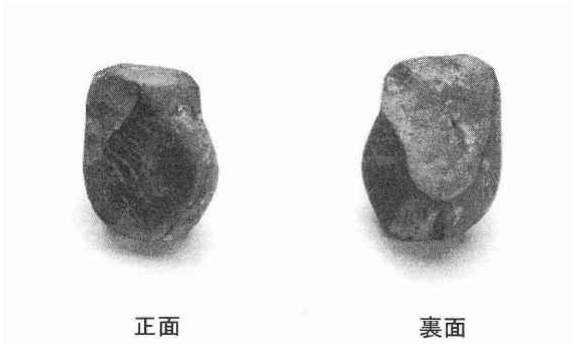
約二万年前の大分県岩戸遺跡の、コケシ形石偶（岩偶）は高さ九・六センチメートル、頭にあたる部分の最大幅は三センチメートル、胴部の幅は二・一センチメートルの大きさである。頭部に目・鼻・口を表現した小さなくぼみが見られ、顔を表現している。

長野県野尻湖では洪積世動物化石と石器およびナウマンゾウの牙を加工したヴイーナス像が発見されている。

海外においても、フランスやイラクの遺跡で、死者が埋葬され、花が手向けられた遺跡が発見されており、この段階では宗教心が芽生えていたことがうかがえる。

四万～三万年ほど前にはクロマニョン人に代表される新人（ホモ・サピエンス）が登場するが、彼らは現代人の直接の祖先であるとされている。

新人の段階では、文化の程度も高くなり、スペインのアルタミラ洞窟などからは壁画



第５図　石製ビーナス像（財部町耳取遺跡）

や彫刻などが発見され、原始的な芸術も存在していたことが知られている。

いずれも、旧石器人の精神生活がどのようなものであったかを考える上で貴重な資料といえる。

6　旧石器時代人の食生活

旧石器時代の遺跡から焼けて赤化した拳大の礫を二〇～三〇個集めた焼石の礫群遺構が県内各地で発見されている。この遺構は、蒸し焼き料理や石焼き料理をしたり暖をとったりするためのものと推測されている。

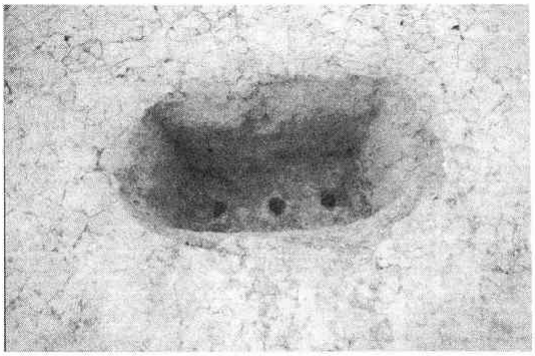
日本旧石器文化の南方への広がりは、これまで九州本島にとどまっていた。

種子島の横峯C遺跡や立切遺跡からは、姶良カルデラの火山灰層（二万五〇〇〇年前）の下層から礫群が検出され、放射性炭素年代で三万年を超える数字が出ている。約三万一〇〇〇年前の礫群（石蒸し料理跡）は、これまで確認された旧石器時代の礫群としては日本列島最南端に位置し、現時点では国内最古のものとされている。種子島の南種子町横峯C遺跡では、姶良カルデラ起源の火山灰層のさらに下から角礫を集めた礫群が二基検出されている。礫群の一基は八〇×七〇センチメートルの楕円形の範囲に火熱を受けた礫が集中し、掘り込みは、七五×六五センチメートルの楕円形で深さは約一〇センチメートルである。放射性炭素による年代測定の結果、三万年以上前の炉跡であることが確認されている。

種子島の横峯C遺跡、立切遺跡、徳之島のガラ竿遺跡、沖縄の山下町洞穴遺跡では、ドングリなどを破砕・すりつぶすために使用されたと考えられる敲石や磨石などの調理具が出土しており、旧石器時代人が植物食にも依存していたことがうかがわれる。

7　旧石器時代人の狩猟

動物の狩猟方法には槍や弓矢を使用する方法や罠をしかける方法などがある。そうした方法の一つとして、動物の習性を利用し、より安全度の高い陥し穴がある。陥し穴は縄文時代にとくに発達した狩猟法であるが、松元町の仁田尾遺跡では旧石器時代末期（約一万三〇〇〇年前）の陥し穴が十一基発見されている。長さ一・六～一・二メートル、巾〇・八～〇・五メートルの楕円形や長方形の平面形をしており、深さは一・六～一・二メートルある。床面には杭（逆茂木）の跡があるタイプとまっすぐ掘りこまれて床に小さい穴が多くみられるタイプがある。今のところ日本最古のものである。



第６図　旧石器時代の陥穴遺構（松元町仁田尾遺跡）

伊集院町竹ノ山遺跡では、妙円寺参りで著名な道路沿いの改修工事にともなって、一万三〇〇〇年以上前の旧石器時代の陥し穴遺構

が二基発見されている。

竹ノ山B遺跡はナイフ形石器文化期終末から細石器文化期の初段階にかけての時期のものである。竹ノ山B遺跡から陥し穴が二基検出されているが、周辺にはもっと存在している可能性がある。完全な形で検出された二号陥し穴は長径一六〇センチメートル、短径一三〇センチメートル、深さ八六センチメートルの大きさで、上から見た形状が隅丸長方形をしている。穴の底には縦列に三本の逆茂木の痕跡があり、大きさから見て猪などを串刺しにして捕獲したものであろう。

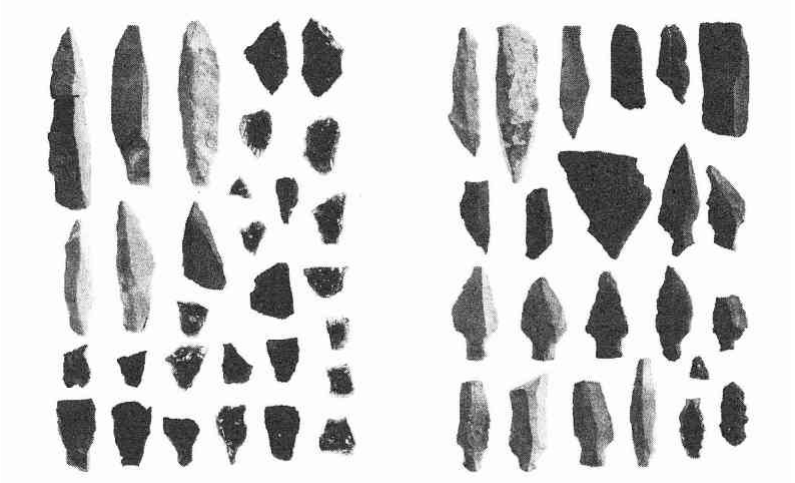
陥し穴遺構は、鹿児島県内では入来町浦之名の鹿村ヶ迫遺跡、出水市上場の大久保遺跡などでも発見されており、旧石器時代の獲物の捕獲法として一般的であったことが知られる。

8　石器の種類と用途

旧石器時代人は、それぞれの目的により石器を作っていた。人類の最初の石器は、自然石に少し加工を加えたものであった。しかし、約三万年前を境にして、形の整った石器を多量に製作する技術が出現する。この時代に使われた石器の種類は豊富で、狩猟や木や皮を切ったり削ったりするためのナイフ形石器をはじめ、槍先として狩猟に使用された槍先形石器・三稜尖頭器・台形石器、角錐状石器（槍の先につけられたと考えられている）などの狩猟具、切截具の役目を持つ削器や獲物の皮を剥いだり、皮をなめしたりする掻器（ソウキ）、木材を加工した削器や溝を彫る彫器、穴をあけるための錐、木や石を打ち割る礫器などの工具、堅果類種子（ドングリ）などを破砕・すりつぶすための敲石（タタキイシ）などの調理具などがある。

とくに二万五〇〇〇年前の姶良・丹沢火山灰（AT）の前後の時期に、ナイフ形石器を中心とした時代が長く続く。そして、旧石器時代の終わり頃になると、長さ二～三センチメートル、幅五～六ミリメートル、厚さ一ミリメートル前後の小型の細長い石器（細石刃）を棒状の柄にはめ込んで槍として用いる細石器が多く現われるようになる。

県内の旧石器時代の遺物群はナイフ形石器を主体とし、剥片尖頭器・三稜尖頭器・台形様石器などの各種の石器が加わりながら展開していき、最終的に細石器文化を経て縄文時代



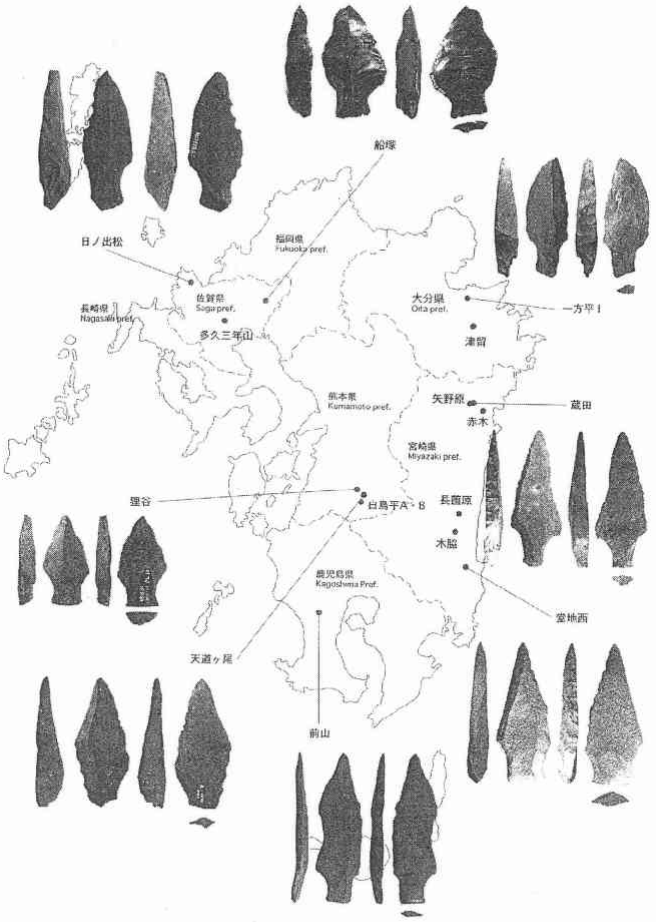
第７図　松元町宮ヶ迫遺跡出土の旧石器

へと移行している。

ナイフ形石器の中には、横剥ぎの剥片を用いるいわゆる瀬戸内技法とよばれるものも発見されている。また、東九州を中心に分布している船野型とよばれる細石刃核や南九州を中心に分布している畦野型とよばれる細石刃核などが県内の各地から発見されている。

これらの資料から、南九州地方の旧石器時代人は石器の製作技術を徐々に向上させ、採集経済に従事していたと推定される。

旧石器の石材を見ると、サヌカイトと呼ばれる安山岩、チャート、大分県の姫島産黒曜石、佐賀県伊万里湾周辺の腰岳産と見られる漆黒色の黒曜石などがあり、二万年位前から、瀬戸内方面や東九州・南九州との間の広い地域で原始共同体間における幅広い交流があったことがうかがわれる。



第８図　九州における剥片尖頭器分布図
（明治大学博物館図録「韓国スヤンゲ遺跡と日本の旧石器時代より」）

第二章　縄文時代

旧石器時代も終末期の細石刃文化期になると、その後半期（約一万三〇〇〇年前）に土器の製作が開始されるようになる。この土器の出現をもって縄文時代の開始としている。

土器で煮炊きすることにより、食べることが出来る食物が増え、また貯蔵することも可能になって縄文人の食生活は飛躍的に豊かになった。

この縄文時代を考古学では草創期（一万三〇〇〇～一万年前）、早期（一万～六〇〇〇年前）、前期（六〇〇〇～五〇〇〇年前）、中期（五〇〇〇～四〇〇〇年前）、後期（四〇〇〇～三〇〇〇年前）、晩期（三〇〇〇～二四〇〇年前）の六期に区分している。

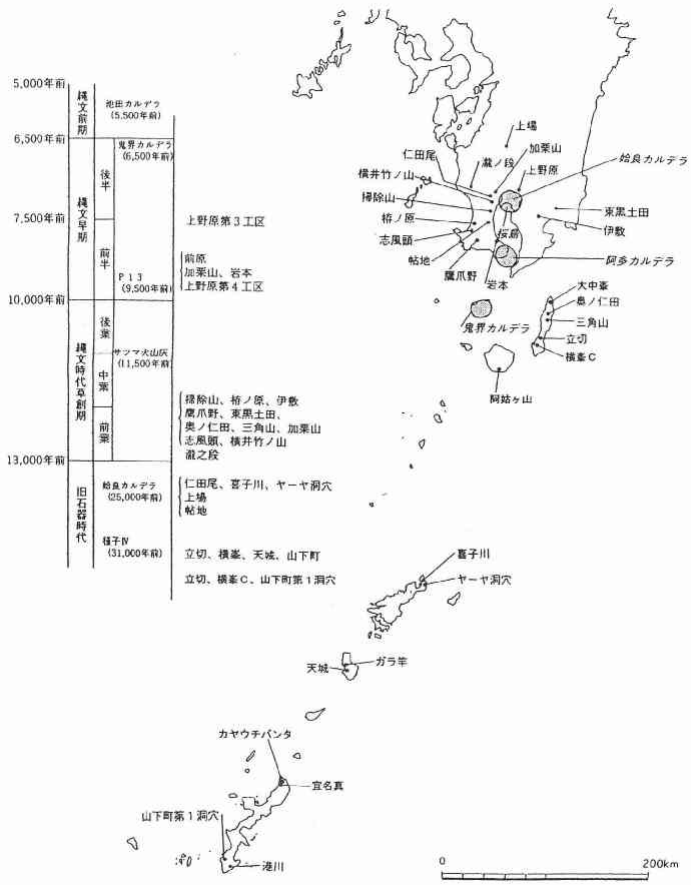
鹿児島湾が出現し、気候が温暖化したことに加え、雨量の増加も作用し、イチイガシなどを主とする照葉樹林に姿を変えていったようである。このような環境の変化は縄文人に多くの食

糧を供給していったことであろう。

旧石器時代から縄文時代にかけての気候の変動は陸地の植物にも大きな変化を与えた。旧石器時代即ち氷河時代の終わり頃、最も寒冷化が進んだ二万年前ころの日本は大半が針葉樹で覆われていた。寒冷化のピークを過ぎると針葉樹林から次第にナラ類を中心とした落葉広葉樹林帯が広がっていたと考えられている。

縄文時代に入って気候が温暖化すると、落葉広葉樹林は次第に照葉樹林へと変化していった。しかしながら、縄文時代を通して、自然環境は一定ではなかったようである。

縄文時代の早期から前期にかけて急激に温暖となり、とくに六〇〇〇～五〇〇〇年前は海水面が最も上昇し、現在よりも三～五メートル高くなったといわれている。いわゆる縄文海進である。その後、小さな海進・海退を繰り返しながら、冷涼化の方向へ向かっていったようである。



第９図　南九州・南島の旧石器・縄文草創期主要遺跡分布図

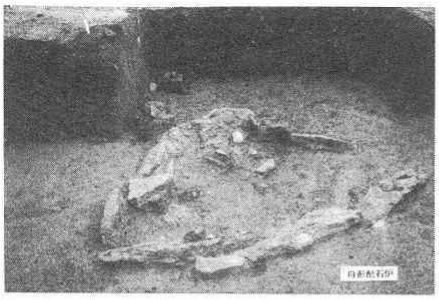
第一節　南九州地方の縄文文化

薩摩火山灰層の直下、いわゆるチョコ層の最上部から、土器や石鏃などの出土例が相次ぎ、旧石器時代細石器文化の終末期から縄文時代草創期にかけての資料が蓄積されつつある。南九州の縄文時代草創期の遺跡の発見例は数一〇ヶ所を超え、九州島全体を見ても、とくに鹿児島県内に密集している。

主な遺跡を紹介してみよう。姶良町建昌城跡遺跡は薩摩火山灰層（約一万二八〇〇年前）の直下から、約一万三〇〇〇年前の竪穴住居跡の可能性のある竪穴状遺構が八基、調理施設と考えられる集石遺構十六基、炉状遺構八基、土坑一〇五基が検出されている。竪穴状遺構は直径三～四メートルの楕円形または円形で、深さ二〇～三〇センチメートルである。

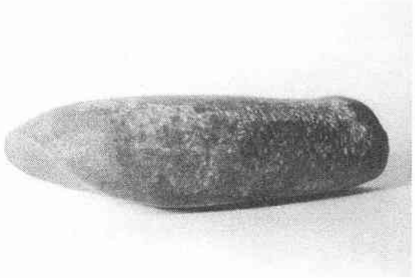
周囲には柱穴とみられるピットがある。炉状遺構

は燻製施設と考えられる連穴土坑である。土器はほとんど無文土器で、石器は石鏃、尖頭状石器、スクレイパー、礫器、楔形石器、磨石、石皿などが出土している。黒曜石とメノウの破片が集中して出土しているところがあり、石鏃を製作していたことが推定されている。縄文時代草創期の遺跡は全国で四〇〇例近く報告されているが、竪穴状遺構が報告されているのは一二遺跡に過ぎない。鹿児島県内



第11図　縄文草創期の舟形配石炉
（加世田市栫ノ原遺跡）

第10図　連穴土坑（煙道付き炉穴）
加世田市栫ノ原遺跡

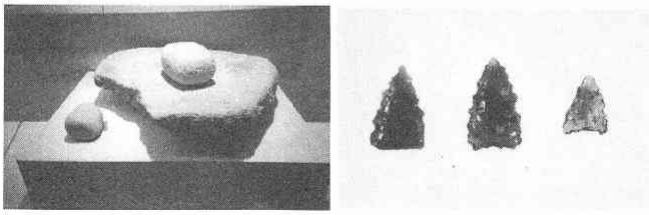


第12図　丸ノミ型石斧（栫ノ原型石斧）
（加世田市栫ノ原遺跡）

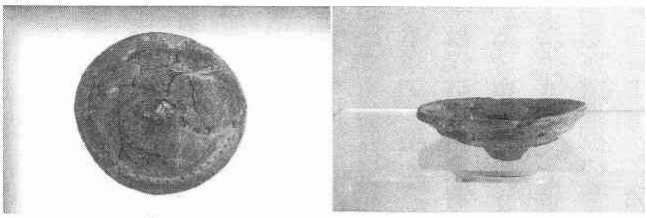
でも、鹿児島市掃除山遺跡、西之表市鬼ケ野遺跡、中種子町三角山遺跡などで検出されていたが、いずれも開発工事による記録保存のため、遺跡は破壊されている。遺構を埋め戻して保存されているのは建昌城跡遺跡だけであり、全国的にみても貴重な遺跡である。

加世田市栫ノ原（村原）遺跡は質・量とも他の遺跡を凌駕している。栫ノ原遺跡（約一万二〇〇〇年前）からは、草創期の約一〇〇〇点に及ぶ隆帯文土器、木工具として使用された磨製石斧（うち一点は世界最古の舟工具とされる丸ノミ形の磨製石斧）、石鏃（黒曜石製と頁岩製）、木の実をすりつぶすための磨石や石皿、スクレイ

第13図　鹿児島市掃除山遺跡（縄文草創期）



第14図　縄文草創期の石鏃、磨石、石皿
（鹿児島市掃除山遺跡）



第15図　縄文草創期の隆帯文土器
（鹿児島市掃除山遺跡）

第16図　最古・最大とされる縄文草創期の隆帯文土器
（加世田市志風頭遺跡）

パー、人の顔を表現したと考えられる軽石製人面石偶などが出土している。食料調理施設としての舟形配石炉・集石遺構・煙道付き炉穴（＝連穴土坑）などの遺構も発見されている。

鹿児島市掃除山遺跡でも同様な遺構・遺物が発見されている。とくに注目されるのは桜島起源の薩摩火山灰層（約一万一五〇〇年前）より下の層に、定住を裏付ける竪穴住居跡二基が検出されたことである。舟形・円形の配石炉、煙道付き炉穴、集石遺構、土坑などの遺構が検出されている。遺物は隆帯文土器のほか黒曜石製石鏃、磨石、石皿、凹石、砥石、磨製石斧、スクレイパーなどの石器が出土している。土器の底部形態も尖底・丸底・平底など多様である。栫ノ原遺跡と掃除山遺跡では煙道付き炉穴からイノシシの脂肪酸が検出されており、燻製の技術を確保していたことがうかがえる。

種子島の西之表市奥ノ仁田遺跡でも、集石遺構・配石炉、土坑が検出され、隆帯文土器、打製石鏃、磨製石鏃、石斧、磨石、石皿などが出土し、縄文時代草創期の文化が海を隔てた種子島まで広がっていたことが確認された。注目されるのは縄文時代草創期の段階で磨製石鏃が登場していることである。つづく早期の段階でも磨製石鏃を出土する遺跡は数か所あり、他地域に見られない特色である。種子島の西之表市鬼ケ野遺跡で一万二〇〇〇年前の草創期の石鏃が約一七〇点出土している。種子島でも弓矢による狩猟が行われていたことを示唆している。この時期のものとしては極めて多い出土量である。黒曜石製の石鏃二点が出土しているが、種子島には黒曜石の産地は発見されておらず、九州本島からもたらされたものであろう。当時の交易・交通路について考察する上で貴重なデーターである。また舟を製作するための工具として使用されたと考えられる丸ノミ形石斧四点も出土している。一万二〇〇〇年前に丸木舟を製作していたことが推定される。鬼ケ野遺跡や中種子町三角山遺跡でも竪穴住居跡が検出されており、種子島でも約一万二〇〇〇年以上前に定住生活を行っていたことがうかがえ、注目される。中種子町三角山Ⅰ遺跡では、アカホヤ火山灰下層から滑石製塊状耳飾りが出土した。アカホヤ火山灰下層出土の初めての出土例であり、南九州地域の耳飾りの起源を探る上で貴重な資料である。当時の人々の美意識を知るうえでも重要な資料である。

草創期の建昌城跡遺跡、掃除山遺跡・栫ノ原遺跡・奥ノ仁田遺跡などの状況はこの時期に早くも定住化が確立していたことを示唆している。草創期の石器群の中でも石皿や磨石など製粉用具の大量の出土は植物性食料への依存度が大きかったことを物語っている。

曽於郡志布志町東黒土田遺跡では、草創期の貯蔵穴から落葉広葉樹の大量の炭化した堅果類（ブナ科＝ドングリ）が発見されており、今のところ日本最古の貯蔵穴とされている。一万二〇〇〇年前早くも食料保存のための技術を確保していたことが知られる。

姶良郡栗野町花ノ木遺跡では縄文早期後半の貯蔵穴からイチイガシが出土している。

草創期から早期にかけて、石皿や磨石などの出土量が非常に多い傾向が認められ、この時期も植物質食料への依存度が高かったことを示唆している。

花粉分析などによって当時の環境復元が試みられているが、南九州の縄文時代草創期から早期には、すでに照葉樹林が発達し、その中で縄文文化が醸成されたと考えられる。

調理施設としての舟形配石炉は東黒土田遺跡、川辺郡川辺鷹爪野遺跡でも発見されているが、今のところ鹿児島県内だけに限られている。

松元町仁田尾遺跡では草創期の道跡と見られる遺構が検出されている。道跡は縄文時代早期にも報告例がある。伊集院町上山路山（カミヤマジヤマ）遺跡は標高約一三〇メートルのシラス台地上にあるが、遺跡のある台地から谷に下る道の跡が二条（一条の長さ約六四メートル）発見されている。二条の道跡はＹ字形に合流し、谷に近い地点、八メートルのところで一本の道となって谷に下っている。縄文時代早期の道跡は、国分市の上野原遺跡・松元町の前原遺跡などで確認されているが、上山路山遺跡のように、谷まで下りていく道の跡が確認されたのは初めての事例である。おそらくシラス台地の崖下に湧きでている水を飲むために朝夕利用していたのであろう。

動物を捕獲する技術として、陥し穴・弓矢・石槍などがあるが、縄文時代草創期・早期にはさらに多くなる。

草創期の日置郡市来町瀧之段遺跡では日本最古とされる石鏃製作の工房跡が発見されている。石鏃は鹿児島市加栗山遺跡・横井竹ノ山遺跡などでは細石器に伴って出土しており、他地域よりも早い時期に出現している。草創期から弓矢の使用による狩猟が行われていたことがうかがわれる。

国の史跡・重要文化財に指定された国分市上野原遺跡では、第四工区の縄文時代早期前葉（九五〇〇年前）と第三工区の早期後葉（七五〇〇年前）の遺構・遺物が注目される。

第四工区の早期前半（Ｐ13＝九五〇〇年前）の地層から、国内で最古最大級とされる集落遺跡が発見された。尾根部に竪穴住居跡五二基、集石遺構三九基、連穴土坑（＝煙道付き炉穴＝燻製施設）一六基、土坑約二六〇基が確認されている。

集石遺構の一基からタヌキ、モズ、ツグミなどのほかアユの脂肪酸が検出されている。土坑の脂肪酸分析の結果は墓である可能性が高いという結果が出ている。

尾根部よりやや低い谷部に集落から水場に通ずる二本の道跡が発

見されている。

竪穴住居跡の平面プランは隅丸方形と長方形の形態で、深さは約二〇～三〇センチメートルである。柱穴が確認されたのは一八基で、竪穴をめぐる形で垂直に掘り込まれていた。

年代の決め手となったのは貝殻を刺突して施文した円筒形や角筒形の平底で、縄文時代早期前葉の前平式土器と桜島起源の火山灰（P13＝九五〇〇年前）が竪穴住居の遺構内に集中して堆積していたことからである。集落を構成する五二軒の竪穴住居跡は国内最多であり、うち一〇軒は桜島火山灰（P13）に覆われていたことから同時に存在していたことになる。居住空間は一人あたり三平方メートルと考えられ、数十名の人々が一緒に生活していたと考えられる。

竪穴住居跡は半環状に配置され、住居配置としての規則性が守られており、何らかの規制が存在していたと見られ定住化を示唆するものである。

第三工区で注目されたのは、平成六（一九九四）年度の調査で、鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層（約六五〇〇年前）の下層から出土した約六万点の土器、土製品、石器などを含む縄文時代早期の包含層である。石蒸し調理施設である集石遺構が一六九基検出されており、定住化がより進んでいたことがうかがわれる。縄文時代早期後半（約七五〇〇年前）に位置づけられる平栫式土器のほか、塞ノ神式土器・押型文土器などがあり、器種も深鉢型土器・壷形土器が数多く出土した。また、縄文時代早期では考えられないような小型土器、手づくねのミニチュア土器、椀状を呈する土器、器台状の透かしを有する土器などがある。アカホヤ火山灰層直下に掘りこまれた土坑の中に完全な平栫式土器の壷形土器二個体が対で埋納されたものがあり、呪術的な用途が考えられる。対で埋納されたものを含め、壷形土器が一〇数個出土したことは壷形土器の出現時期（七五〇〇年前）とその用途を考える上で注目される。壺形土器は、これまで弥生時代から出現するものとされていた。完全な形の壷が埋まっていた上野原遺跡の南東の端（五〇平方メートル）区域は、石斧五本を地中に突き刺した状態の遺構、耳栓、土偶、人形石偶、用途不明の土製品・石製品が出土しているが、遺跡内の他の場所に比べて遺物の出土量は極端に少ない。この一角は「祭祀を行う聖域」であったことが考えられる。平栫式土器に伴う十余個の耳栓の発見によって、耳栓の起源が従来よりさらに数千年遡ることになった。耳栓は日本最古の、土偶は早期のものとしては、九州ではじめて出土した西日本最古の土偶である。ともに祭祀に関係するものであろう。上野原遺跡の縄文時代早期における遺跡の規模の広さ、遺物の質・量の豊富さ、遺構の多様さは九五〇〇年前の南九州が日本列島の中で他に先駆けていち早く安定した定住生活を営み、高度な精神文化が発達していたことを物語っている。

草創期から早期にかけて、集石、配石炉、炉穴、竪穴住居、堅果類貯蔵穴などが検出され、さらに土器、石皿、磨石、敲石類、磨製石斧など定住に関わる道具が安定して出土している。生活の安定は精神的なゆとりを生み、軽石製人面石偶、土偶などの祭祀・呪術品や、耳栓などの装身具をつくり出した。

出水市大坪遺跡は、縄文時代晩期の遺跡であるが、装身具である管玉・勾玉が多く出土し、未完成品も多いところから、これらを製

作していた可能性が高い。

屋久町の屋久島横峰遺跡から三五〇軒を超える後期（約三五〇〇年前）の竪穴住居跡が密集して発見され、集落形成前に整地が行われていた可能性も指摘されている。市来式・一湊式土器が多数出土している。楕円形を基調とする竪穴住居跡が複数切り合って多数検出され、周囲に土坑群が広がっている。石器組成も特徴があり、石皿、磨石、叩石、石斧等が多く、石鏃をはじめ剥片石器が未発達である。

鹿児島市大龍遺跡は縄文後・晩期の祭祀遺跡である。縄文後期（御領式）の九基の竪穴遺構の中から出土例の珍しい人面軽石製品や石偶・石版・石棒・陰石・垂飾品など多種類の軽石製品が大量に出土した。中でも女性の性器を表現したとしか考えられない大量の陰石の出土は豊かな生産を祈願したものと思われる。

加世田市上加世田遺跡は縄文晩期初頭の単純遺跡である。直径二〇メートルの窪地の中心を囲むような形で、多くの軽石製の石偶・石版・石棒・凹石や硬玉製の管玉・勾玉・小玉などが出土している。硬玉の原石・攻玉用砥石・管玉の半製品なども出土し、玉の製作が行われたことを示唆している。頭部と四肢を欠いた土偶、甕に入れた軽石製石偶、集石の中に配された軽石製石棒などから祭祀遺跡と考えられている。

注目される遺跡として軽石製石偶を多数出土した垂水市柊原貝塚がある。柊原貝塚は、鹿児島湾沿いの標高約一〇メートルの沖積平野に立地する。縄文時代後期から古墳時代にかけての複合遺跡で、主体となる貝塚が形成された時期は、縄文時代後期である。約六〇点にもおよぶ軽石製の石偶は、五～二五センチの大きさの軽石に線刻を施し、人体を表現したと考えられるものである。棒状ないし楕円盤状の形を呈する。また、線刻による頭部・両腕足の描き方には、規則性もうかがえ、赤色顔料を施した形跡が残っているものも数点出土している。当時の精神文化がうかがえる資料である。貝塚は、広さ約五〇〇平方メートル、平均層厚は約一・一メートルで、マガキガイ・バイガイ等の巻貝を主体とする。中心部分では純貝層と破砕貝層が互いに層をなしていた。

第二節　縄文人

縄文人とは、いったいどんな人々だったのだろう。縄文時代の遺跡からはしばしば人骨が発見されることがある。垂水市柊原貝塚の土坑墓から保存状態の良い埋葬人骨が二体検出されている。一体は貝層下層から検出された二〇歳前後の男性人骨である。もう一体は、縄文時代後期の層から検出された三〇代の女性人骨で、上顎の犬歯が左右とも抜歯されていた。犬の埋葬骨も発見されている。出水市出水貝塚、市来町市来貝塚、垂水市柊原貝塚などから出土した縄文人の骨から推察すると、男性の身長は一五五～一六〇センチメートルほどで、がっしりした体格をしており、上下に短い角張った顔つきをしていたようである。女性の身長は一四五～一五〇センチメートル前後で、男性と同じく角顔で、骨太な体格をしていたらしい。

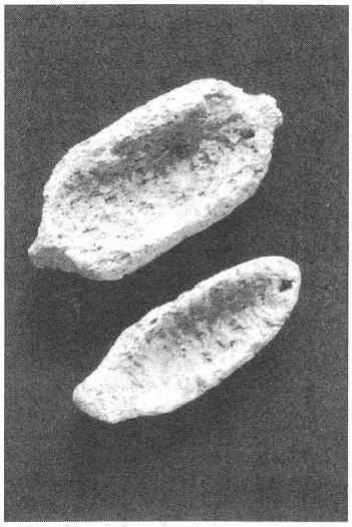
縄文時代は厳しい自然環境でもあったらしく、力強く見える体格とは逆に、出土する骨からみて縄文人の平均寿命は三〇才前後であっ

たと推定されている。

第三節　縄文人の交流

遺跡から出土した遺物を見ると、縄文時代には旧石器時代よりもさらに人や物の交流が盛んであったようである。縄文土器は、その形や文様にそれぞれの地域の特徴を持っているが、その地域の土器に混じって全く異なった地域の特色を示す土器が出土することがある。このことは縄文人が他の地域から土器を運んだり、人が交わることによって他地域の土器の特徴が伝わったりすることを示している。鹿児島地方でも瀬戸内地方や北九州・中九州地方などの特徴を示す土器や黒曜石が出土しており、縄文人の交流の広さをうかがうことが出来る。

平成九年（一九九七）、鹿児島県立埋蔵文化財センターが発掘調査を行った東市来町市ノ原遺跡から、三角檮形（サンカクトウガタ）製品と呼ばれる土製品（長さ八・一センチメートル、幅五・〇センチメートル、高さ四・九センチメートルの大きさで、ヘラ状の工具で丁寧に仕上げられている）一点と石製品三点が出土した。三角檮形土製品は、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけて、東北地方から北陸地方にかけて分布するもので、呪術用に用いられたと考えられている。また、石製品も、同じ頃、富山県や岐阜県から東北地方にかけて分布するが、いずれも、近畿以西の西日本には出土例が無かった。市ノ原遺跡の三角檮形土製品と石製品は、これらの地域の三角檮形製品と深い関わりがあると考えられ、日本海・東シナ海を経て、南九州地方と精神的な文化面での交流があったことが推定される。



第17図　軽石製舟形模造品
（鹿児島市草野貝塚）

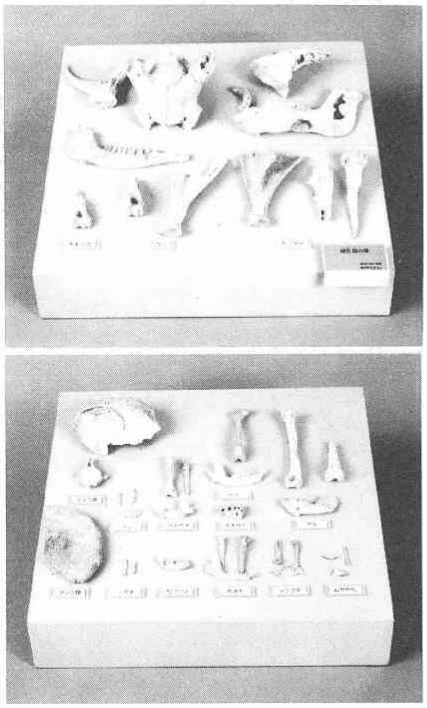
第四節　縄文時代の彩色土器

縄文時代早期の伊集院町稲荷原遺跡では、直径約七〇センチメートル、深さ約二十八センチメートルの大きさの土坑の埋土中から、土器内面に赤色顔料（ベンガラ＝酸化鉄）が塗彩された岩本式土器（約九五〇〇〇年前）が出土している。岩本式土器は縄文早期初頭の最古段階のものとされている。この土器は約一万一五〇〇年前の噴火で堆積したとされる薩摩火山灰（桜島起源）の直上から出土することから、実年代はそれに近いと考えられる。土器に彩色されたものとしては日本列島の中でも最古級のものであり、全国的にも注目されるものである。ほかに伊集院町上山路山遺跡や指宿市岩本遺跡などからも同様の赤彩土器が発見されている。赤彩土器の使用目的は分からないが、特別な意味があったのであろう。このように飾られたものは、一般に祭祀などに使用されたと考えられている。

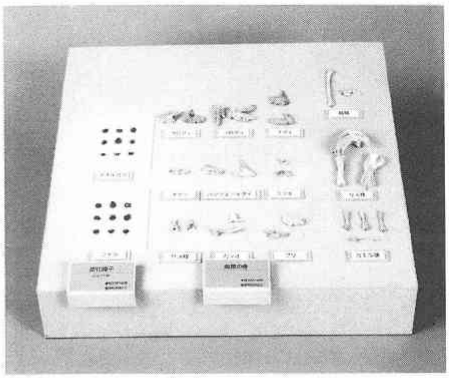
第五節　縄文人の食生活と環境

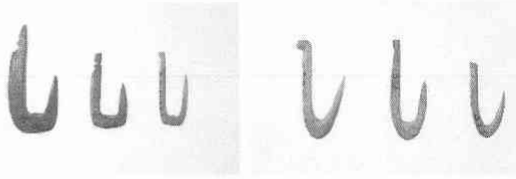
縄文時代の人々はどのようなものを食べていたのであろうか。鹿児島市下福元町草野に所在する草野貝塚は鹿児島湾に面した標高四〇メートルの台地の縁辺部にある。縄文時代後期の市来式土器を主体とし、厚さ約一・七メートルの貝層が堆積する貝塚である。北九州や瀬戸内の系統の土器も出土しており、遠隔地との交渉が行われていたようである。出土遺物の主なものをあげてみると、石斧、軽石製の石偶・垂飾品・丸木舟を模した舟形模造品、鹿角製垂飾品、骨製笄、鯨骨製骨刀、オオカミの顎の骨で作った垂飾品、犬の犬歯の垂飾品、魚堆骨製の耳栓、サメ歯耳飾、骨製釣り針などがある。哺乳類は、イノシシ（全体の七三パーセント）とシカ（全体の二三・五パーセント）が圧倒的に多く、カモシカ、オオカミ、イヌ、タヌキ、アナグマ、カワウソ、テン、イタチ、ノウサギ、ムササビ、ネズミ、サル、イルカ、クジラなど、魚骨はマグロ、マダイ、アジ、サメなどがある。

吹上町黒川洞穴は縄文時代前期から弥生時代後期の数千年にわたって断続的に生活が営まれていたようである。吹上浜の海岸から約六・五キロメートルの距離にあるが、魚骨としてサメ、マダイ、クロダイ、フナ、貝類としてハマグリ、アコヤガイ、マルサルボウ、オキアサリ、イタヤガイ、ツメタガイ、オキシジミ、カワニナなど海産、淡水産の貝類が出土している。海がかなり内陸部に入り込んでいた様子がうかがえる。哺乳類としてイノシシ（全体の六五パーセント）、シカ（全体の二一パーセント）、カモシカ、ツキノワグマ、オオカ



第19図　鹿児島市草野貝塚出土の獣骨類





第18図　鹿児島市草野貝塚出土の釣針と魚骨類

ミ、イヌ、タヌキ、アナグマ、テン、イタチ、ノウサギ、ムササビ、モグラなどが、鳥類としてキジ、ガン、カモ、ハト、ワシタカ目などが出土している。ツキノワグマは志布志町の片野洞穴でも出土している。カモシカは出水市出水貝塚、さつま川内市麦之浦貝塚などでも出土している。オオカミも麦之浦貝塚で出土している。当時の南九州は、現在では見られないオオカミやツキノワグマ、カモシカなどが生息するような自然環境であった。イヌは垂水市柊原貝塚、奄美大島笠利町の宇宿小学校構内遺跡、徳之島の犬田布貝塚でも出土している。柊原貝塚のイヌは埋葬された状態で出土しており、当時家族同然の扱いを受けていたことが推測される。宇宿小学校構内遺跡の埋葬犬は掘り込みの中に、横に寝かされた状態で埋葬されている。このほかにもう一頭犬を埋葬した遺構がある。南島においては犬の報告例は極めて珍しい。

第三章　弥生時代

「弥生式土器」と命名された土器は、明治十七年（一八八四）に東京都文京区弥生町の向丘貝塚（東京大学構内）で発見された。これまで知られていた縄文式土器と形が違うところから、出土した弥生町の名前をとって「弥生式土器」と名付けられた。この弥生式土器が使用された紀元前四・三世紀ごろから紀元後三世紀ごろまでが弥生時代である。この時代は土器や文化の内容によって、前期（二三〇〇年～二一〇〇年前）、中期（二一〇〇年～一九〇〇年前）、後期（一九〇〇年～一七〇〇年前）の三時期に区分されている。

最近の研究で、弥生時代の開始時期はこれまで考えられていたよりも、数百年早くなることが主張されているが、反対意見を主張する研究者もおり、その評価は定まっていない。

ここでは従来の編年観に従って述べていきたい。

弥生文化は大陸文化の影響によって成立した、水稲耕作を中心とする農耕文化である。

また金属器の使用によっても特色づけられている文化であるが、その在り方は地域によって異なっている。

コメ作りの開始によって始まった弥生時代は、縄文時代の終わりから弥生時代にかけて、気温が三～四度下がり、寒くなるという自然の変化の影響も強く受けている。

弥生時代の遺跡から発見されている遺物や銅鐸に描かれているイノシシ・シカ狩りの様子から、縄文時代からの狩猟や植物採集生活なども引き続いて行われていたことがわかる。

北九州に始まった稲作文化は、弥生時代前期のはじめに西日本一帯にひろがり、ついで関東地方・東北地方に及んでいる。

前期初頭の土器である板付Ⅰ式土器は鹿児島県下では金峰町高橋貝塚、甑島の里村中町馬場遺跡、鹿児島大学構内遺跡、南種子町広田遺跡等で確認されている。

高橋貝塚では籾痕土器や石庖丁などが発見されており、北九州とほぼ変わらない時期に稲作文化が南九州の地に到達していたことが知られる。

一般に弥生時代の「ムラ」は、稲作に適した沖積地を望む台地上に営まれることが多く、丘陵上にあるのは、小規模な集落である。

南九州の地はシラス台地が多く、稲作に適した地域が少なかったために生産性が低かったと考えられ、弥生文化は北九州ほどにはあまり発達していない。

高橋貝塚は熊本県斎藤山貝塚とともに最古級の鉄器を出土した遺跡としても知られているばかりでなく、南島産のゴホウラ貝やオオツタノハ貝などを輸入し、高橋貝塚で貝輪（腕輪）を製作したことでも知られている。ゴホウラ貝製の貝製品は薩南諸島の種子島広田遺跡でも多数発見されており、弥生時代に遠く海を隔てて、南島との文化交流があったことがうかがわれる。石器は大陸系の磨製石器の系統を引く、石包丁・扁平片刃石斧・柱状抉り入り石斧・蛤刃石斧・磨製石鏃・石剣・石鎌・石錘などの石器類のほか、紡錘車、貝輪、骨・角・牙製鏃、イノシシの牙などでつくられた牙製釣針などが出土している。石包丁は稲穂の穂摘み用に、石斧類は伐採や加工用の工具に、石鏃は狩猟用に、石剣は宗教儀礼用に、紡錘車は織物用に、それぞれ用いられたものである。

鹿児島市鹿児島大学構内遺跡（郡元団地）で、前期後半ごろの環濠跡と水田跡と稲株の痕跡が明瞭な中期の水田跡が検出されている。生産関係の様相をうかがい知る貴重な遺跡である。南九州における初期稲作の実態も少しずつ解明されてきている。

九州脊梁山脈から南の地域は、中期以後弥生文化は停滞してしまうが、中期を代表する遺跡として、肝属郡大根占町山ノ口遺跡と鹿屋市王子遺跡があげられる。

山ノ口遺跡は、錦江湾に面した砂丘地に形成された祭祀遺跡であるが、軽石を円形に並べた環状配石遺構の周辺から土器や磨製石鏃のほか、軽石で作った勾玉・石棒・陰石・石偶などが発見されている。壷形土器はすべて底に近い部分に穴をあけてあり、近くから数か所の焚火の跡が発見されたことなどから、当時の人々が豊かな生産を祈って祭りを行った場所と考えられている。

王子遺跡は標高約七二メートルの笠野原台地の西端に位置する。棟持柱をもつ建物跡、方形・円形のほか張り出しベッド状遺構をもつ竪穴式住居跡など南九州ではあまり類例をみない集落遺跡である。瀬戸内地方の土器に多くみられる矢羽根透かしの文様のついた高坏形土器や、北朝鮮のヤリガンナとよく似た鉄器などが出土しており、早くから北九州と南九州との間に交通路が確立していたことが考えられる。鍛冶滓の出土によって、鉄の加工技術をもっていたことも知られる。

九州新幹線鹿児島ルートの建設に伴い発掘調査が実施された川内市京田遺跡は、低湿地遺跡である。中期の水田跡とそれに伴って杭列も検出され、木製農具（田下駄・鍬・鋤）も多数出土している。流木に混じって木製品が出土しているが、そのなかにはホゾ穴のある建築材とみられるものがあり、高床建物の横架材と推定されている。付近からは丸太に三段の切り込みのある梯子とみられるものも検出されている。そのほか、擢、網枠なども出土している。

弥生時代の住まいは竪穴住居が主体であったようである。主なものを上げてみると、大崎町下堀遺跡では、約二〇〇〇年前の山ノ口式土器期の大型円形住居跡二基、方形住居跡一〇基が検出されている。これらのうちの二基は直径七メートルを超える大型の遺構である。吾平町名主原遺跡では、約一八〇〇〇年前の終末期の花弁型住居

跡が一三基検出されている。花弁型住居は日向地方に多く分布する住居のスタイルで、この方面との深いかかわりがあることが推定される。

金峰町芝原遺跡では舶載鏡の破鏡一点と小形仿製鏡三面が出土している。また大分方面の安国寺式土器も出土しており、交易を考えるうえで貴重な発見である。

川辺町寺山遺跡で、約二〇〇〇年前の弥生時代中期中頃の二重環濠が出土した。断面がV字状で幅約二メートル、深さ約二メートルで、内側が長さ約三〇メートル、外側が約七メートルの範囲に一部検出された。溝内から入来Ⅱ式のほか、北九州の須玖式、中九州の黒髪式土器が出土している。環濠は金峰町尾下遺跡などでも発見されている。中国の歴史書には「倭国大乱」の記事があり、弥生時代の後半期の日本列島は動乱の時代であったことが記載されている。このような緊張状態の影響が南九州にも及んでいたのであろう。

鹿児島県内の弥生時代の埋葬については、発見例が少なく、あまり良くわかっていない。わずかに薩摩半島の吹上砂丘沿岸に支石墓（ドルメン）や、甕棺葬の例が知られているだけである。最近、金峰町尾ケ原遺跡で中期の壷棺が一基出土した。壺二個を合せたもので、下壺は北部九州の須玖式、上壺は熊本県を中心に分布する黒髪式とされる。また、甑島里村の中町馬場遺跡では埋葬跡五基（人骨六体）が検出されたが、南海産のゴホウラ製貝輪片が発見されており、南島との交流があったことがうかがえる。今のところ、小児棺を含めて弥生時代の埋葬関連資料のほとんどは薩摩半島西半部に集中して発見されている。支石墓や甕棺、壺棺などは北九州からもたらされた葬制であり、弥生時代は土器などから見ても中九州・北九州方面との交流が盛んであったようである。そのほかに、川辺郡川辺町堂薗遺跡では、弥生時代終末期（二～三世紀）の土壙墓が約七〇基発見されている。古墳時代の土壙墓につながるものであろう。

第四章　古墳時代

第一節　畿内型高塚古墳

三世紀代半ば、近畿地方に成立したヤマト王権の王墓として巨大な前方後円墳や円墳が築造されるようになった。三世紀後半には北九州地方に、四世紀から五世紀にかけて南九州にも波及している。これは、地域の有力者の墓であるが、中でも近畿地方を中心とした有力者は、しだいに支配力を強め、五世紀の終わりには、東北南部から九州まで支配するようになる。このころ、朝鮮半島から多くの技術集団が渡来し、土木技術や須恵器の製作技術、金属の加工技術を伝えている。これらの先進的な技術を受け入れることに成功した畿内の有力者たちが、権力を強大化していくようになる。その後、七世紀代にいたるまで、各地で前方後円墳や円墳などの高塚古墳が作られている。

五世紀代に大隅半島の志布志湾沿岸・肝属川流域に飯盛山古墳、横瀬古墳、唐仁大塚古墳などの巨大な前方後円墳が、薩摩半島では四世紀代に阿久根市鳥越古墳、五世紀代以降に川内市船間島古墳、

指宿市敷領古墳、加世田市六堂会古墳などが築造されている。天草を望む長島には多くの古墳が築造されているが、その石室構造は肥後の影響が認められる。

そのころの南九州には、畿内地方から波及してきた高塚古墳とは異なる独特の埋葬法が盛行している。いわゆる熊襲・隼人の墓制とされる地下式横穴墓・地下式板石積石室墓・土壙墓などである。

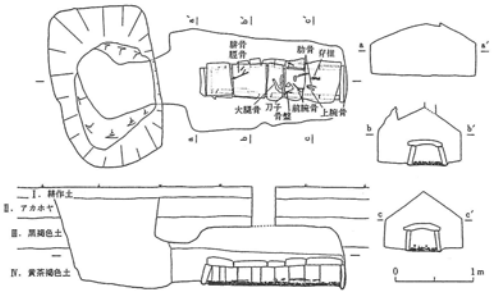
第二節　古墳時代の熊襲・隼人の墓制

1　熊襲と隼人

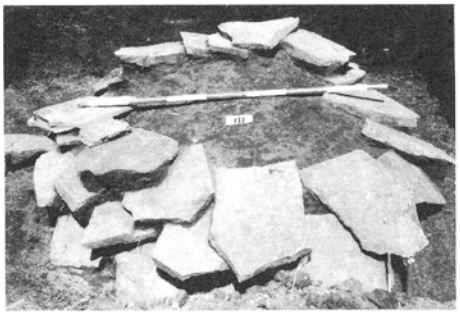
古代の南九州には、熊襲あるいは隼人と呼ばれ、中央の人々から異民族視された人々が居住していた。古事記（七一二年成立）・日本書紀（七二〇年成立）に記載されているところの熊襲・隼人の征討伝承は、大和政権に反抗する異民族としてあつかわれ、反乱を繰り返したことが伝えられている。日本書紀の伝承記録から見て、三～四世紀代大和朝廷に抵抗した南九州の人々は熊襲と呼ばれ、大和朝廷に服属した五世紀代以後は隼人と呼ばれた。

2　地下式横穴墓

地下式横穴墓は群をなして発見される。地表から約二メートルの深さに垂直に竪穴を掘り、さらに横の方に水平に掘り広げていき、羨門（センモン）（入口）と羨道（センドウ）（通路）と玄室（遺骸と副葬品を納める部屋）を作る。羨門は石塊や粘土塊で閉塞する。竪穴は土で完全に埋めてしまうものと竪穴の入口に蓋をして竪穴部



第21図　原田地下式横穴墓



第22図　別府原３号地下式板石積石室墓
鹿児島県薩摩郡薩摩町別府原
地下式板石積石室墓の上部構造
（葺石の一部が抜き取られている）

第20図　古墳時代の南九州

分を空洞にしているものとある。

従来は地表に標識を持たないとされ、偶然の機会に天井部分が陥没して発見されることが多かったが、近年の調査結果から墳丘を有する例もあることが確認されている。

宮崎県内では西都市西都原と高鍋町持田古墳群を結ぶ線から南側に、鹿児島県内では大隅国に含まれる川内川上流域の大口・菱刈・栗野・吉松と志布志湾沿岸地域に分布している。川内川上流域では地下式板石積石室墓と共存し、志布志湾沿岸地域では畿内型高塚古墳と共存している。日向地方に見られる地下式横穴墓は一般に副葬品が豊富であり、大規模のものが多い。これに対して大隅地方のものは規模が小さく副葬品が武器類に限られる傾向が強い。

3　地下式板石積石室墓

地下式板石積石室墓も隼人の墓制の一つとされている。

地表下一～二メートルの深さのところに数一〇センチメートル大の板石を立てて、直径一～二メートル内外の石室を作り、石室を覆う形で持送り式に数一〇枚の板石を積み重ねる。石室の平面プランは円形と方形が基本的なものであるが、それから変化した形状のものもある。円形石室は内陸部に多く、長方形石室は沿海地域に多い。

現在発見されている地下式板石積石室墓の石室の八〇パーセント弱が直径一・五メートル以下である。屈葬位が多かったと思われる。二体以上の埋葬例が多く天草の妻ノ鼻では、一石室に一二体埋葬されていた例が報告されている。追葬が行われ、家族墓としての性格が強かったと思われる。地表に標識が無いため、偶然の機会に発見されることが多いが、大口市大住や鶴田町湯田原の例の様に円墳状の封土を有するものもある。

分布圏は①川内川流域、②出水・高尾野を含めた不知火海沿岸地域、③人吉盆地、④五島列島を含む西北九州沿岸の四地域に大きく分けられる。

地下式板石積石室墓はこれら四地域で構造・形態などにそれぞれ差異が認められる。

地下式板石積石室墓の源流は弥生時代の埋葬法に求められ、西北九州の長崎県五島列島方面から北薩地方に伝播したことが考えられる。

最も分布が濃密なのは川内川流域であり、上流域では地下式横穴墓と共存する例が多いが、地下式横穴墓よりは時期的に古い。

薩摩地域では出水市溝下、高尾野町堂前、川内市横岡、鶴田町小松原・湯田原、薩摩町別府原、大口市大住・焼山・春村、吉松町永山などが知られている。

4　土壙墓

土壙墓は土中に小さな竪穴を掘り、直接遺骸を葬る墓である。地表に墓標などがないために発見しにくい遺構である。形状は平面的には長楕円形、円形、長方形、方形などを呈する。土壙墓は薩摩半島南端部に局地的に見られる墓制であるが、発見例が少なく、指宿市橋牟礼川遺跡、揖宿郡山川町成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡などが知られている程度である。その分布圏は地下式横穴墓や地下式板石積石室墓などのようには、はっきりしていなかったが、二〇〇五年

七月川辺郡川辺町堂薗遺跡弥生時代終末期（二〜三世紀）の土壙墓が約七〇基発見され、これまで資料の乏しかった薩摩地域の墓制の解明に貴重な情報を提供した。

土壙墓は長方形で、大きいものは縦四メートル、幅二メートル、深さ一メートルあり、二段掘りになっている。副葬品・人骨は発見されていない。木棺を収めたものとされている。床面近くから朱・丹が検出されている。川内川以南の薩摩半島地域は古墳時代の墓制が不明であり、空白地帯であった。堂薗遺跡の土壙墓遺跡の発見は古墳時代の土壙墓につながる可能性が高く、この地域の空白を埋める好資料である。

第三節　古墳時代の集落

古墳時代の人々はどのような生活をしていたのであろうか。古墳時代の人々が営んだ墓制についてはある程度わかってきたが、暮らしについてはほとんどしられていない。それを探る手がかりの一つに住居がある。鹿児島市の鹿児島大学構内遺跡は、縄文時代から近代までの複合遺跡である。郡元キャンパスの総合研究棟建設に伴う発掘調査で、土器集積遺構と八〇軒の竪穴住居跡群が発見されている。竪穴住居跡の平面プランは方形を基本としている。住居群の中には、張り出しやベッド状の高まりを持つ住居跡のほか、床面から赤色顔料が検出された住居跡などもある。また、遺構の残存状況が良好で、壁ぎわの板材痕跡が確認できるものもあり、住居の内部構造を研究する上で重要な発見である。いずれも六世紀代と考えられている。ほかにも溝状遺構や遺物廃棄場、自然流路跡なども確認されている。土器集積遺構は、直径約三〇メートルにわたって土器を中心とする古墳時代の遺物が集中するもので、中央部分の直径約五メートルの範囲は、土器が重なり合い、塚のような状況をなしている。集落景観を再現する上で貴重な資料である。出土遺物には、成川式土器、須恵器、袋状鉄斧、勾玉、ガラス製小玉、石製玉などがある。

指宿市橋牟礼川遺跡で集落遺跡が発見されている。貝塚も発見されているが、注目される遺構に畑跡がある。イネ、アワ、ヒエなどのプラント・オパールが検出されており、当時の食生活の一端がうかがえる。畑跡には数条の細い平行した溝跡が走っており、馬鍬痕と推定されている。馬の骨も発見されており、当時の農耕の様子が知られる。畿内の陶邑産の須恵器、青銅鏡、青銅鈴なども発見されており、中央との交流が盛んに行われていたようである。県内各地で鉄刀、鉄鏃、鉄斧などが散発的に出土しているが、山川町成川遺跡からは大量の鉄器が発見されている。橋牟礼川遺跡では鍛冶工房と考えられる遺構も発見されている。県内の各地で、鍛冶遺構に関係あると推定される遺物が発見されることから、南九州地方には鉄器の使用が普及していたようである。

以上のほか、薩摩半島地域では、鹿児島市武遺跡（E地点）で竪穴住居跡一二基、溝、土坑などが検出されている。吹上町小中原遺跡では七基の竪穴住居跡を検出している。そのうちの一基の竪穴住居からは、土器の集中廃棄がみられ、成川式土器とともに五世紀中頃に比定される初期須恵器が出土し、袋状鉄斧も出土している。そ

のほか、川内市吉原遺跡、日吉町原口遺跡、金峰町芝原遺跡、同町尾ケ原遺跡、同町渡畑遺跡、川辺町古市遺跡などで集落ないし集落に伴う遺構が検出されている。

大隅半島地域でも同様の状況が認められ、南九州全域にわたって人々が生活していた様子がうかがえる。有明町仕明遺跡では馬具が出土しており注目される。なお、鹿児島湾岸に面している鹿屋市周辺部では、古墳時代の遺跡が爆発的に増えている様相がうかがえる。

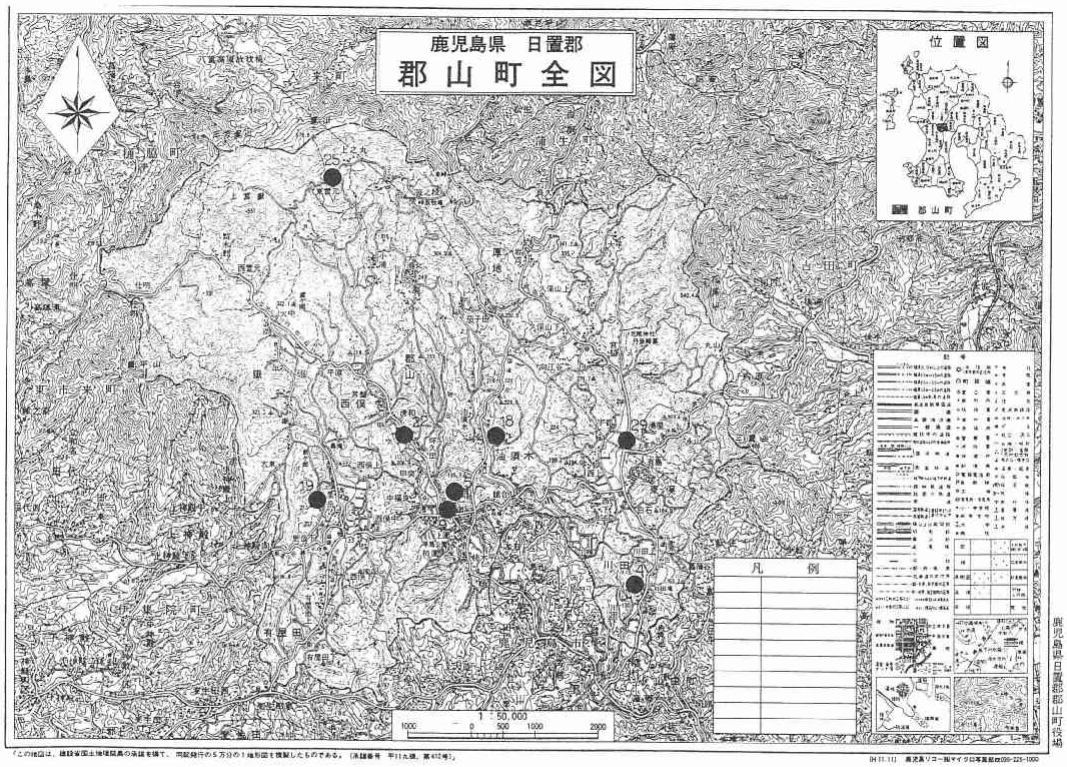
第五章　郡山町の歴史

第一節　郡山町の地理的環境

郡山町は四周を標高一八〇～三〇〇メートル前後の山々に囲まれ、甲突川水系や神之川水系に属する中小河川によって形成された狭隘な谷状の低位部が南北に切れ込むという地形的特徴を有する。

湯屋川は吉田町と郡山町の町境付近から流れてくる小規模河川で、狭隘な谷を形成しながら西に流下し、湯屋原遺跡から南西に五〇〇メートルほどのところで川田川に合流する。

この湯屋川に沿って東に向かうと比較的緩斜な舌状台地となり、さらに東に進めば思川水系に属する小規模河川によって形成される低位部へと到達する。現在吉田町と郡山町を結ぶ県道四〇号線はこの地形的特徴に沿ってつくられている。さらに東に視野を広げれば、思川水系に属する本名川に沿って姶良町域へといたる。



第23図　郡山町主要遺跡分布図

遺跡一覧(旧郡山町)

遺跡番号	カナ 名称	所在地	地形 時代	備考
32－1	トウゲ 峠	鹿児島市郡山町笹ノ段	台地 縄文(早)	開墾地より出土
32－2	イワト 岩戸	鹿児島市花尾町柚迫	台地 縄文	
32－3	カワダケボショ 川田家墓所	鹿児島市川田町1855	山麓緩斜面 中世(室町)	旧大川寺(廃寺)
32－4	カワダジョウアト 川田城跡	鹿児島市川田町城ほか	丘陵 文明年間	比志島一族，川田氏の居城
32－5	コオリヤマジョウアト 郡山城跡	鹿児島市郡山町松尾ほか	丘陵 中世(鎌倉)	郡山氏の居城
32－6	ヒジリジョウアト 聖城跡	鹿児島市西俣町和田	丘陵 中世(鎌倉)	比志島一族，西俣氏の居城
32－7	ヒラジョウアト 平城跡	鹿児島市西俣町平ノ城	丘陵 中世(鎌倉)	比志島一族，辺牟木氏の居城
32－8	アリヤダジョウアト 有屋田城跡	鹿児島市有屋田町鶴丸ほか	丘陵 中世(鎌倉)	麦生田一族，有屋田氏の居城
32－9	ジトウカリヤアト 地頭仮屋跡	鹿児島市郡山町6517	低地 近世	当時の石工の築いたものと伝えられる
32－10	カワダドウゾノノクヨウトウグン 川田堂園の供養塔群	鹿児島市川田町1238	山麓緩斜面 中世(鎌倉)	(県)昭和57．6．27
32－11	ハナオジンジャノボトウグン 花尾神社の墓塔群	鹿児島市花尾町花尾神社境内内	山麓緩斜面 中世(北朝)	(町)昭和55．3．27
32－12	トキワゴリントウグン 常盤五輪塔群	鹿児島市郡山町3136	山麓緩斜面 中世(鎌倉)	(町)昭和57．6．29
32－13	シモカワハラダ 下川原田	鹿児島市東俣町下川原田	自然堤防 中世	平成10年度確認調査
32－14	ビシャモンジョウアト 毘沙門城跡	鹿児島市東俣町谷口ほか	丘陵 中世	中世城館跡
32－15	ミズノテジョウアト 水ノ手城跡	鹿児島市郡山町水ノ手	丘陵 中世	中世城館跡
32－16	ジンノオジョウアト 陣ノ尾城跡	鹿児島市東俣町宇都頭	丘陵 中世	中世城館跡
32－17	アツチジョウアト 厚地城跡	鹿児島市花尾町長畑ほか	丘陵 中世	中世城館跡
32－18	ユスキジョウアト 油須木城跡	鹿児島市油須木町上ノ原	丘陵 中世	中世城館跡
32－19	ウトバル 宇都原	鹿児島市郡山岳町宇都原	台地 縄文	昭和63年度確認調査
32－20	ヒガシバル 東原	鹿児島市郡山岳町東原	台地 縄文	平成3年度農政分布調査
32－21	セゴシ 瀬越	鹿児島市花尾町瀬越	台地 縄文	平成6年度農政分布調査
32－22	トキワバル 常盤原	鹿児島市郡山町常盤原	河岸段丘 縄文，中世	平成6年度土木分布調査，平成11年度確認調査，平成13年度本調査
32－23	ニタバル 仁田原	鹿児島市郡山町仁田原	台地 縄文，弥生，中世	平成8年度農政分布調査
32－24	カイエダバナ 海江田鼻	鹿児島市郡山町海江田鼻	台地 縄文	平成8年度農政分布調査
32－25	ヤカタオ 屋形尾	鹿児島市郡山町屋形尾	台地 縄文，中世	平成9年度発掘調査
32－26	コウラバル 小浦原	鹿児島市郡山町小浦原	台地 縄文，中世	平成8年度農政分布調査
32－27	オオウラバル 大浦原	鹿児島市郡山町大浦原	台地 縄文，中世	平成8年度農政分布調査
32－28	ナカハラ 中原	鹿児島市郡山町中原	台地 縄文，中世	平成8年度農政分布調査
32－29	ユヤバル 湯屋原	鹿児島市東俣町湯屋原	河岸段丘 縄文～中世	平成10年度確認調査，平成11・12年度発掘調査
32－30	ナカノサコ 中ノ迫	鹿児島市郡山町中ノ迫6000－1ほか	台地 弥生，中世	平成13年度農政分布調査，平成14年度確認調査
32－31	マツオ 松尾	鹿児島市油須木町松尾1251ほか	台地 縄文，古代	平成14年度町内遺跡詳細分布調査
32－32	ナカホウギ 中方限	鹿児島市油須木町中方限639－1ほか	河岸段丘 縄文	平成14年度町内遺跡詳細分布調査
32－33	カワダナカハラ 川田中原	鹿児島市川田町中原551－1ほか	台地 縄文，古代，中世	平成14年度分布調査
32－34	シバタテ 柴立	鹿児島市有屋田町柴立956－1ほか	台地 縄文，古代，中世	平成14年度分布調査
32－35	ドウノサコエー 堂ノ迫A	鹿児島市郡山町堂ノ迫5880－1ほか	台地 縄文，近世	平成15年度町内遺跡詳細分布調査
32－36	ドウノサコビー 堂ノ迫B	鹿児島市郡山町堂ノ迫5490－1ほか	台地 近世	平成15年度町内遺跡詳細分布調査
32－37	スガムタ 菅牟田	鹿児島市郡山町菅牟田3500－1ほか	台地 縄文，近世	平成15年度町内遺跡詳細分布調査
32－38	キタハラ 北原	鹿児島市郡山町北原3147－2ほか	河岸段丘 中世	平成15年度町内遺跡詳細分布調査
32－39	ハゼガマル 枦ヶ丸	鹿児島市郡山町枦ヶ丸2211－1ほか	河岸段丘 縄文，古代	平成15年度町内遺跡詳細分布調査
32－40	ヤナギノシタ 柳ノ下	鹿児島市郡山岳町柳ノ下2933－5ほか	台地 縄文	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－41	マエバタ 前畑	鹿児島市郡山岳町前畑2291－2ほか	河岸段丘 縄文，古代～近世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－42	ヒラノジョウ 平城	鹿児島市西俣町平城1575ほか	河岸段丘 縄文，古代～近世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－43	イシノモト 石ノ元	鹿児島市西俣町石ノ元1302－1ほか	河岸段丘 縄文，古墳，古代～近世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－44	カリヤゾノ 仮屋園	鹿児島市有屋田町仮屋園109ほか	河岸段丘 古代～近世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－45	シモマキハラ 下牧原	鹿児島市有屋田町下牧原781ほか	台地 縄文，古代～中世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－46	タカツキ 高付	鹿児島市有屋田町高付575－1ほか	河岸段丘 縄文，古代～中世	平成16年度町内遺跡詳細分布調査
32－47	エンショウジアト 円照寺跡	鹿児島市郡山町寺下	山麓緩斜面 江戸	三国名勝図会
32－48	ホウトウジアト 法憧寺跡	鹿児島市郡山町寺下	山麓緩斜面 江戸	三国名勝図会
32－49	サンリュウジアト 珊隆寺跡	鹿児島市東俣町原田	山麓緩斜面 江戸	三国名勝図会
32－50	オオカワジアト 大川寺跡	鹿児島市川田町太ラケ宇都	山麓緩斜面 室町～江戸	三国名勝図会

第１表　郡山町内遺跡地名表

湯屋原遺跡の北側を川田川沿いに進むと、郡山町北部へと通じるが、標高三〇〇～五〇〇メートル以上の山々によって行く手をさえぎられている。南側には川田川から、さらに甲突川沿いに進むと、鹿児島市域へと通じることになる。西に向かっては、標高二〇〇メートル前後の比較的低い山々を隔てて、油須木川、甲突川によって形成される低位部が南北に延びている。こうした地形的特徴は、郡山町域に限られるものではなく、薩摩半島内陸部に通有にみられる特徴である。山間地を中小規模河川によって形成された狭隘な低位部が延びるという地形的特徴の中で、時代を問わず河川が人々の移動・交通の上で大きな役割を果たしてきたであろうことは想像に難くない。現在でも、この地域にすむ人々は、狭隘な低位部あるいは河岸段丘を利用して耕作地を確保し、農業を営んでいる。こうした地形的景観のもとで人々がどのように自然環境に適応し、生業を組み立て、社会・文化をつくりだしてきたのか、湯屋原遺跡をはじめ郡山町内で発見された遺跡から、そうした歴史的変遷の一端をうかがうことができる。

第二節　郡山町の歴史的環境

郡山町内の遺跡周辺は山々によって囲まれている。郡山町内は周知の遺跡は少ないが、周辺の鹿児島市・松元町・伊集院町のように、新幹線や高速道路に係わる開発工事が行われていないために遺跡が発見されていないだけのことである。別の見方をすれば、われわれの祖先が残したであろう貴重な埋蔵文化財が破壊されずに保存されていることを意味している。そういう意味では誇りとすべきであろう。

おそらく、今後の分布調査、発掘調査によって、現在未確認の遺跡が明らかにされていくであろうことは十分考えられる。

そのような事情もあって、郡山町内で発掘調査が行なわれた遺跡は極めて限られている。現在、埋蔵文化財包蔵地も含めて三〇ケ所の遺跡が確認されているが、そのうち発掘調査が実施されたものは七ケ所である。中世城館は一〇ヶ所知られている。そのほか、遺物散布地が九ヶ所知られている。

時代別にみてみると、遺物を出土している遺跡は、縄文時代一三ケ所、弥生時代二ケ所、古墳時代一ケ所、奈良・平安時代二ケ所、中世は中世城館を含めて一八ケ所、近世は一ケ所となっており、現時点では、縄文時代と中世の遺跡が圧倒的に多い。

縄文時代に関しては、遺跡の詳細な内容がわかるものは限られているが、湯屋原遺跡で志風頭式土器以降の早期全体にわたる豊富な遺物および前期の遺物が出土している。笹ノ段遺跡では押型文土器、常盤原遺跡では吉田式土器、押型文土器などの縄文時代早期の遺物が出土している。また、常盤原遺跡および湯屋原遺跡では縄文時代中期・後期・晩期の遺物も出土している。

弥生時代に関しては、仁田原遺跡と湯屋原遺跡において若干の土器が出土しているが、弥生時代の遺跡の実態は、その分布も含めてほとんどわかっていない。

古墳時代についても、常盤原遺跡で成川式土器と考えられる土器片が出土しているものの、極めて断片的である。

奈良・平安時代については、湯屋原遺跡では、土師器、墨書土器のほか掘立柱建物十五棟（ただし、中世のものを含む可能性が高い）が検出されており、今後の調査によって郡山町域内で奈良・平安時代に属する遺跡が確認される可能性が高い。このほか、常盤原遺跡でも平安時代に属する土師器と黒色土器が出土している。

中世に関しては、確認されている遺跡の多くが山城を中心とする城館跡で、鎌倉時代から室町時代にかけて、在地氏族の居城が集中的に営まれたことがわかる。山に囲まれる郡山町内の地形的特徴とも関連して、この時期の歴史的動向を考える上で興味深いところである。

近世の遺跡としては、地頭仮屋跡が知られている。東南アジア産（タイ陶磁器）の陶磁器が出土しており注目される。

湯屋原遺跡が所在する川田川流域の遺跡について概観してみると、川田城跡、毘沙門城跡、陣ノ尾城跡の三ケ所の中世城館が確認されている程度で、これらの城館跡についてはよくわかっていない。このほかには、下川原田遺跡があり、中世の遺物が出土しているが、試掘調査が実施されたにとどまり、詳細は不明である。湯屋原遺跡では各時代の遺物が出土しており、今後川田川流域で多くの遺跡が確認される可能性を示唆している。

このように、郡山町内は調査が稀薄な地域であり、遺跡の分布および遺跡の内容はほとんど明らかになっていないが、これまでに郡山町内で発掘調査された遺跡の中で、とくに湯屋原遺跡の発掘調査成果によって、郡山町内の地域の歴史を考える上で貴重な新たな知見が得られることになった。ことに縄文時代早期・前期、古代～中世に関しては単に郡山町内だけでなく周辺地域も含めた中で、今後調査・研究を進めていく必要性を強く示唆している。

郡山町内の遺跡の中で主なものを、郡山町教育委員会の発掘調査報告書に基づいて紹介することとする。

第三節　二万年前の郡山町周辺地域

氷河時代の最後、ヴュルム氷期と呼ばれる約二万年前のころは、地球全体の気温が低下し、地球上の水の多くは地上で凍り、海水の量が減ったため、海水面は大きく低下した。

郡山町周辺の地形は、すでに現在に近い姿となっていたが、海面は現在と比べると一〇〇メートル以上も低かったため、鹿児島県本土と種子島、屋久島とは陸続きになっていた。このころ、桜島はまだ誕生していなかったようである。周辺地域の調査結果から、郡山地方でもこのころから人々が生活していた可能性は高い。

郡山町域の旧石器時代の追求は、発掘調査例が少ないためなかなか成果が上げられないでいるが、近年西回り道路の調査によって近隣の鹿児島市、松元町、伊集院町、東市来町などで旧石器時代の文化層の確認例が増加しつつある。

鹿児島市加栗山遺跡は旧石器時代終末期の包含層から約七万点の遺物を出土した。細石刃、細石刃核、削器等の他、縄文時代の遺物とされてきた石鏃、石皿、磨製石斧が共伴し、旧石器時代から縄文時代への過渡期の様相が見られる。

鹿児島市横井竹ノ山遺跡では、細石刃、細石刃核、楔形石器、磨

石、石皿などが石鏃、土器と共伴して出土している。細石器と土器との共伴は出水市上場遺跡や鹿児島市加治屋園遺跡等にも見られる。細石器と石鏃との共伴関係については加栗山遺跡で出土した際、一部で疑問視されていたが、横井竹ノ山遺跡での発見例によって再確認されることとなった。福井型細石刃核（長崎県）の存在は西北九州との関連性を示唆している。

仁田尾遺跡は日置郡松元町石谷仁田尾に所在する。標高約一九五メートルの台地に立地し、旧石器時代、縄文時代草創期・早期・前期・中期・後期・晩期、平安時代の各時期の遺構・遺物が検出された複合遺跡である。旧石器時代の層はナイフ形石器文化と細石器文化の二つの時期に渡っている。細石器文化の時期には、細石刃、細石刃核、削器、打製石斧、磨製石斧、磨石、敲石など六万点をこえる遺物が出土している。

とくに注目されるのは細石刃文化にともなう十一基の陥し穴である。平面形は長方形で、床面には三～八個の杭跡と考えられる小穴がみられる。このような形態の陥し穴は全国的にも最も古い時期の陥し穴であり、旧石器時代の動物獲得の手段が知られる。また細石器に無文土器片や石鏃が共伴して出土しており、弓矢による獲物獲得法もあったことも知られ、旧石器時代から縄文草創期への過渡期の状況がうかがえる興味深い遺跡である。

これら周辺地域の資料から判断して、今から、およそ二万年位前には郡山町周辺地域の小高い丘陵や河川の周辺において狩猟や採集を行い、火を使って獲物を調理していた旧石器時代の人々の生活の一端をうかがい知ることができる。

今後、郡山町地域における本格的な発掘調査が行われれば、市街地周辺の洪積台地上などから旧石器時代の遺跡・遺物の発見される確率は極めて高く、近い将来に旧石器時代の様相がはっきりとしてくることであろう。

第四節　郡山町内の遺跡

1　湯屋原遺跡

湯屋原遺跡は、平成九年（一九九八）度末、郡山町東部地区の中山間地域総合整備事業に伴う分布調査によって発見された遺跡である。その調査結果を受けて、事業着手前に遺跡の性格や範囲を把握する目的で確認調査が実施された。

確認調査は、平成一一年（一九九九）二月八日から二月一九日まで行われ、事業計画実施区域内の約六〇〇〇平方メートルの範囲に、縄文時代早期・前期の包含層が存在することが明らかとなった。

この確認調査の結果をもとに、事業計画の変更による遺跡の現状保存は不可能と判断され、緊急発掘調査による記録保存がはかられた。調査は事業計画に沿って二ヵ年にわたって実施された。

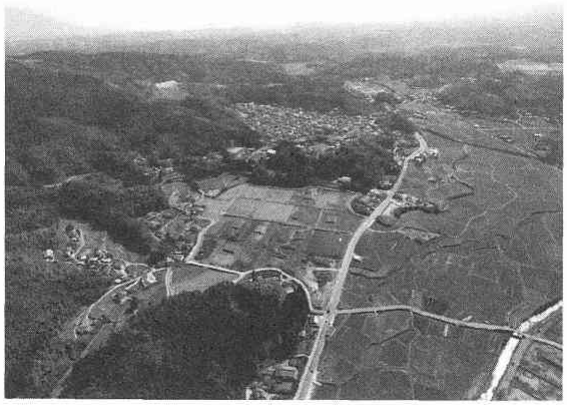
平成一一年度は遺跡を二分する県道の東側（第Ⅰ調査区＝調査面積四六〇〇平方メートル）を、平成一一年（一九九九）一一月八日から平成一二年（二〇〇〇）二月一五日にかけて、平成一二年度は県道の西側（第Ⅱ調査区＝調査面積二七一八平方メートル）を、平成一二年（二〇〇〇）七月三日から九月二九日にかけて発掘調査が行われた。

湯屋原遺跡は、鹿児島市東俣町字湯屋原二七三番地一他に所在する、縄文時代早期前葉から中葉、後葉、縄文時代前期を中心とし、弥生時代・古代・中世の遺物も出土している。

遺跡は甲突川水系に属する川田川が形成する低位部に面し、東側から流れてくる湯屋川の北側に、同じく東側から延びてくる尾根の末端の微高地上に位置している。

遺跡の標高は一三六メートル前後で、川田川の流下面からは二〇～三〇メートルの比高差を測る。遺跡は西側に向かって開けた景観を有し、東・南・北側は一八〇～三二〇メートル前後の山によって囲まれている。

東側には標高四八六・四メートルを測る三重岳、北側には標高五四〇・四メートルを測る花尾山からそれぞれ延びてくる三〇〇メートル以上の山が重畳しており、郡山周辺でも最も高い山々によって景観が生み出されている。



第24図　郡山町湯屋原遺跡遠景

湯屋原遺跡の縄文時代

湯屋原遺跡では縄文時代早期と前期の土器が多量に出土しているが、そのうち早期に属する資料が大半を占めている。早期に相当する土器群は、アカホヤ火山灰層下位の第Ⅲ層を中心として出土し、アカホヤ火山灰層上位の第Ⅱa層では縄文時代前期に属する土器群が中心的に出土している。おおむねアカホヤ火山灰層を境として、下の方から縄文時代早期の土器が、上の方から前期の土器が出土している。

縄文時代早期の土器群は、志風頭式土器、加栗山式土器、吉田式土器、石坂式土器、無文土器、桑ノ丸式土器、政所式土器、中原式土器、押型文土器、手向山式土器、妙見式土器、平栫式土器、塞ノ神式土器などである。

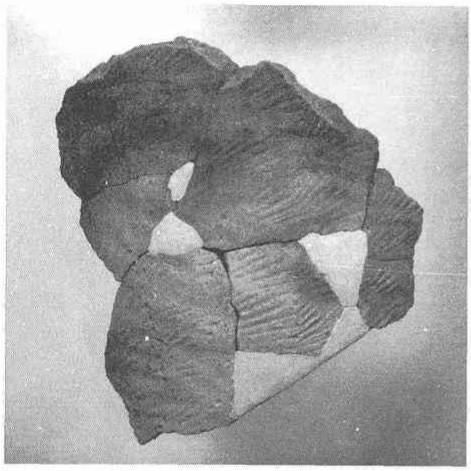
縄文時代前期初頭の土器群は、轟B式土器、轟B式に伴うと考えられる条痕のみを施す土器、深堀式土器（ないし野口式土器と考えられるもの）、阿多式タイプの土器、曽畑式土器、深浦式土器等である。轟B式土器と曽畑式土器は熊本県宇土市を中心に分布している土器で奄美・沖縄でも発見されている。このことは、六千年位前から九州と沖縄の遠隔地間の交流があったことを意味している。

ここに列挙されている土器型式名は、それぞれがはじめて発見された土地の名前を付けている。その後、同じような土器が他の場所で発見された場合、その土器の型式名を使うが、それは人と物が交流したことを意味している。

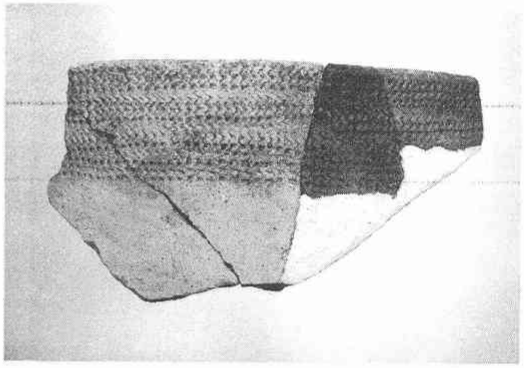
縄文時代中期・後期初頭・後期後半・晩期の土器も出土している。量的には多くないが、断続的に生活が営まれていたことを意味している。

吉田式土器

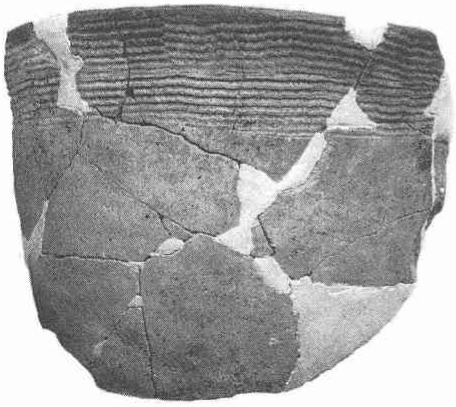
石坂式土器



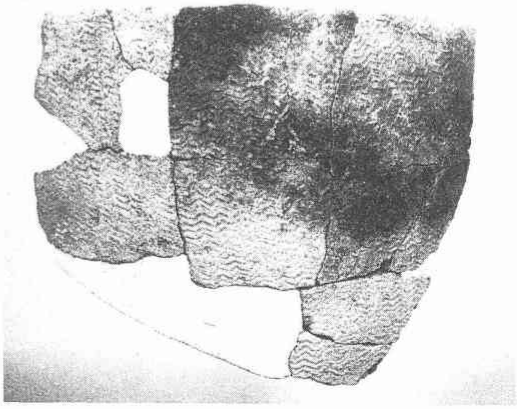
桑ノ丸式土器



政所式土器



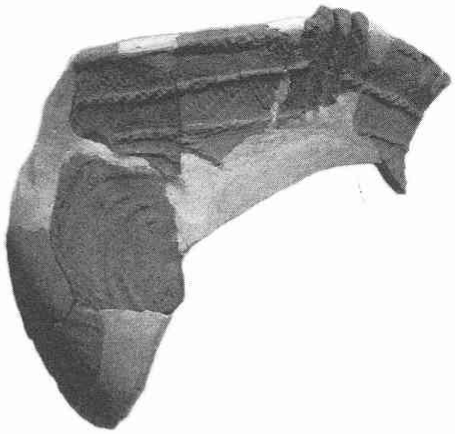
中原式土器



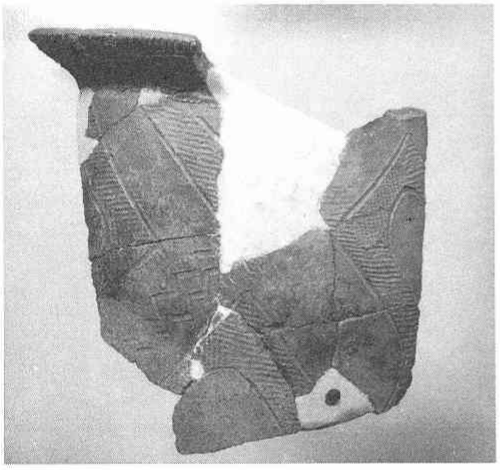
押型文土器

第25図　郡山町湯屋原遺跡出土の縄文土器

手向山式土器

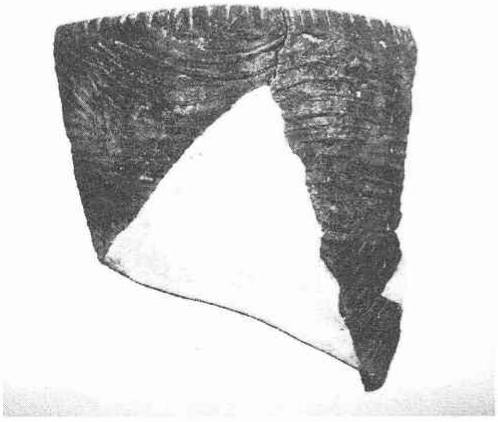


妙見式土器

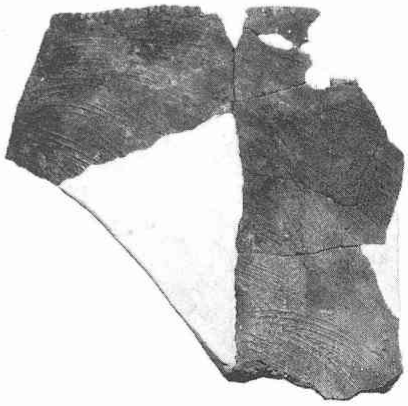


塞ノ神式土器

鎌石橋式土器

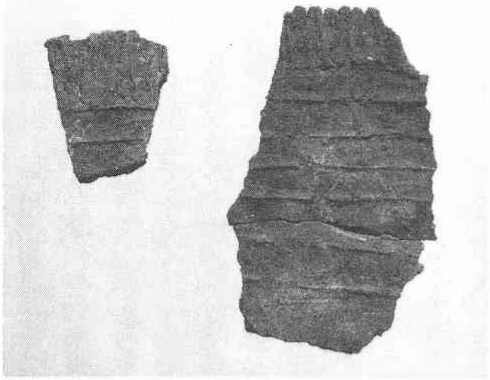


右京西式土器



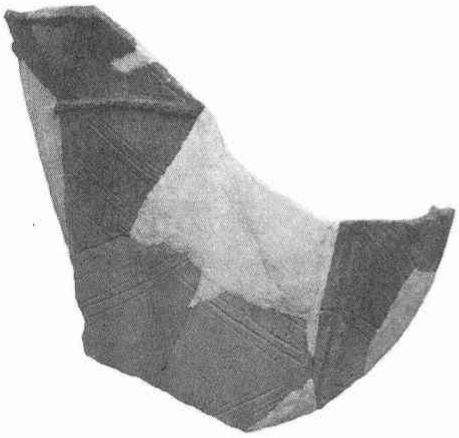
轟Ａ式土器

第26図　郡山湯屋原遺跡出土の縄文土器



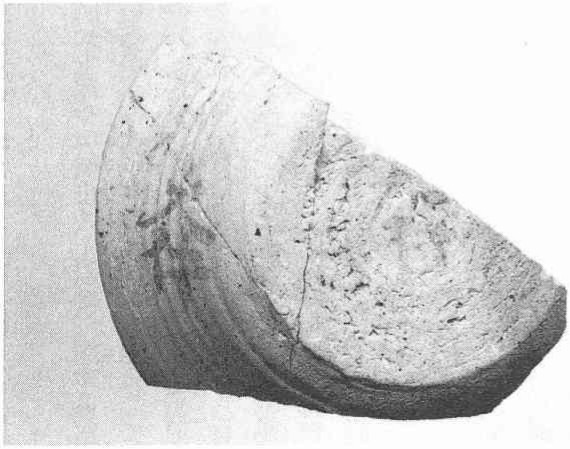
轟B式土器

曽畑式土器



深浦式土器

弥生式土器（甕）



土師器坏　墨書（大伴）

第27図　郡山町湯屋原遺跡出土の縄文土器、弥生土器、墨書土師器

湯屋原遺跡で出土した多量の土器群のうち最古に位置づけられるのは、志風頭式土器である。志風頭式土器は加世田市の志風頭遺跡ではじめて出土した土器である。前平式土器と加栗山式土器の中間に位置づけられる土器で、鹿児島県内から宮崎県南部を中心にして分布する土器型式である。

姶良町建昌城跡遺跡や松元町前原遺跡では、多量の志風頭式土器が出土し、竪穴住居も検出されている。一万年以上前に竪穴住居を造営し、定住的な生活をしていた。

志風頭式土器に続く加栗山式土器の段階は、土器の出土量から見て、小規模で限定的ではあるが、一時的に生活をしていた可能性が高いようである。この時期には約六・五キロメートル離れたところに位置する加栗山遺跡で多数の竪穴住居が営まれている。そうした状況は吉田式土器の古段階（吉田式Ⅰ式期）においても同様で、小規模ではあるが、一時的利用の傾向には変化はみられなかったようである。この吉田Ⅰ式土器を多く出土している遺跡として鹿児島市の加栗山遺跡や小山遺跡などがある。

吉田Ⅱ式から吉田Ⅲ式の時期にかけて、湯屋原遺跡の土器の出土量は増大している。少なくともそれまでの遺跡の利用形態とは大きく異なり、人々は生活の場としてよく利用したようである。石坂式土器古段階にも同程度の遺跡利用形態が展開していたようである。石坂式土器新段階になるとさらに土器の出土量が増大しており、人々は繰り返し居住していたようである。南九州の貝殻文円筒形土器群の中で石坂式土器に後続するとされる下剥峰式土器は出土しておらず、一時的に遺跡の利用が断絶した可能性が高い。続く桑ノ丸式土器の段階においても居住活動が活発化することはなかったようである。

外来系とされる政所式土器や中原Ⅲ式土器は、熊本県南部に一つの分布域を形成しているが、薩摩半島中央部でも出土している。湯屋原遺跡出土の中原Ⅲ式資料から見て、一定期間、湯屋原遺跡にこれらの土器を使用する人々が居住していたことが考えられる。

手向山式土器は、押型文、撚糸文、沈線文を施す土器が、数個体ずつ出土しており、手向山式土器の時期には、短い断絶の期間があるものの、比較的近接した時間幅の中で連続的に人々が湯屋原遺跡で生活していたと思われる。

手向山式土器に後続するとされる妙見式土器も出土量は限られているが、手向山式土器に近接する時期に湯屋原遺跡の利用が継続されていたようである。平栫式土器も同様に限定的で、一時的な遺跡の利用形態を示しているのであろう。

塞ノ神式土器では、いわゆる撚糸文系と貝殻文系が出土しており、連続的に湯屋原遺跡が利用されている状況がうかがえる。塞ノ神式土器に後続する早期末から前期初頭の土器群は、右京西式、鎌石橋式、轟Ａ式、西之薗式に相当するものがそれぞれ出土しており、アカホヤ火山灰（約六五〇〇年前）の降灰をはさんで人々が居住していたようである。

湯屋原遺跡ではアカホヤ火山灰の堆積は約二〇センチメートルであり、自然や生活環境に与える影響は小さなものではなかったと思われる。湯屋原遺跡周辺は周囲を山に囲まれる地理的環境の中にあり、アカホヤ火山灰の堆積が他の地点より稀薄であったと考えられ

る。一時的な居住地の移動を経て、湯屋原遺跡の利用が再開されたようである。

前期には西之薗式に後続して轟B式が展開するが、轟B式土器の古・中・新各段階の資料が含まれており、連続的に人々が遺跡を利用していた状況がうかがわれる。

さらに、前期では阿多式タイプ土器、曾畑式土器、深浦式土器が出土しており、断続的にではあるが、引き続き遺跡が利用されていることが分かる。しかし、縄文時代中期以降は、後期の土器が出土しているものの、その出土量は限られている。湯屋原遺跡は前期以前ほど生活の場として利用されなくなったようである。

以上の検討から、湯屋原遺跡は早期・前期を中心として一時的な断絶を伴いながらも、連続的・反復的に利用されていたことがわかる。

湯屋原遺跡の集石遺構

湯屋原遺跡からは、縄文時代早期の集石遺構が六基検出されている。

集石遺構の中からは炭化した木片や焼けた鳥・獣の骨などが検出されることが多く、調理施設であるとされている。主な遺構を紹介してみよう。

集石遺構二は、約一〇×八〇センチメートルの範囲に、直径が一〇～二〇センチメートル前後の礫を五五個集めていた。土坑は確認されていないが、平坦に広がる状態で構築されていた。

集石遺構三は、皿状にくぼんだほぼ円形の土坑の中に、一〇～二〇センチメートル前後の礫を、三〇個以上集めて構築されている。土坑の規模は約八〇×七〇センチメートル、深さ約二〇センチメートルである。

湯屋原遺跡出土の石器

石器は石鏃、石鏃未成品、石斧、石匙、削器・掻器類、局部磨製異形石器、敲石、擦痕のある礫、使用痕のある剥片、二次加工剥片、敲石、磨石、石皿などのほか、石核、剥片、砕片類も出土している。

これらの石器類の石材には、黒曜石、安山岩、流紋岩、メノウ、珪質頁岩、チャート、頁岩、粘板岩、滑石、砂岩、凝灰岩、石英などがある。中でも黒曜石は全体の五八パーセントで圧倒的に多く、メノウが二九パーセント、安山岩が一〇パーセントと、この三種類の石材が卓超している。これらの石材の中には産地が同定できるものもある。

黒曜石は、鹿児島県内産のものとして、鹿児島市三船周辺産、薩摩郡樋脇町上牛鼻周辺産、もしくは日置郡市来町平木場産（八房川上流域周辺）のものが出土している。

県外産のものは、佐賀県伊万里市腰岳周辺産、長崎県亀岳周辺産、長崎県針尾産、大分県姫島産が確認されている。このことから、一万年から六千年前の縄文時代早期に、郡山の縄文人が遠く長崎県や大分県の縄文人と交流を行っていたことがうかがえる。

石鏃

石鏃はⅢb層から二一点、Ⅲa層から三三点、Ⅱa層から二六点

出土している。

Ⅲb層出土の石鏃の石材は、黒曜石、メノウ、安山岩、チャート、流紋岩などが、Ⅲa層の石鏃の石材はメノウ、黒曜石、安山岩などが、Ⅱa層出土の石鏃の石材は、安山岩、黒曜石、メノウなどが用いられている。縄文時代早期前半と早期後半以降とは石材の利用の仕方が異なっている。

石鏃の基部に、えぐりの入らないもの、えぐりの入るもの、弧状を呈するものなどがあり、石鏃の形状も正三角形、二等辺三角形、五角形、長二等辺三角形などさまざまである。

石斧は、Ⅲb層からは砂岩製一点、粘板岩製一点が、Ⅲa層からは砂岩製二点が出土している。四点とも局部磨製石斧である。Ⅱa層出土の石斧は二点である。一点は断面が楕円形で全面が研磨されている磨製石斧である。他の一点は局部磨製石斧である。

削器・掻器類は、Ⅲb層三点、Ⅲa層一〇点、Ⅱa層十一点出土している。

石錐はⅢa層から一点、Ⅱa層から三点出土している。

石匙は、Ⅲb層から三点、Ⅲa層から一〇点、Ⅱa層から九点出土している。Ⅲ層出土の石匙の石材はチャート、メノウ、安山岩、黒曜石が、Ⅱ層出土の石匙の石材は安山岩、メノウ、チャートである。

石匙は、剥片の縁辺にのみ調整を施して刃部を作出するものと、全体的に剥離を施して整美な形態に整えるものがあり、さらに横長のもの、縦長のもの、台形を呈するものなど、製作技法、形態において多種多様である。石匙は南九州では早期後葉以降に一般的にみられる。湯屋原遺跡の石匙は、複数の技法、形態的特徴が認められ、時期差を示す可能性が高い。使用された石材は、チャート、黒曜石、メノウ、安山岩などがある。

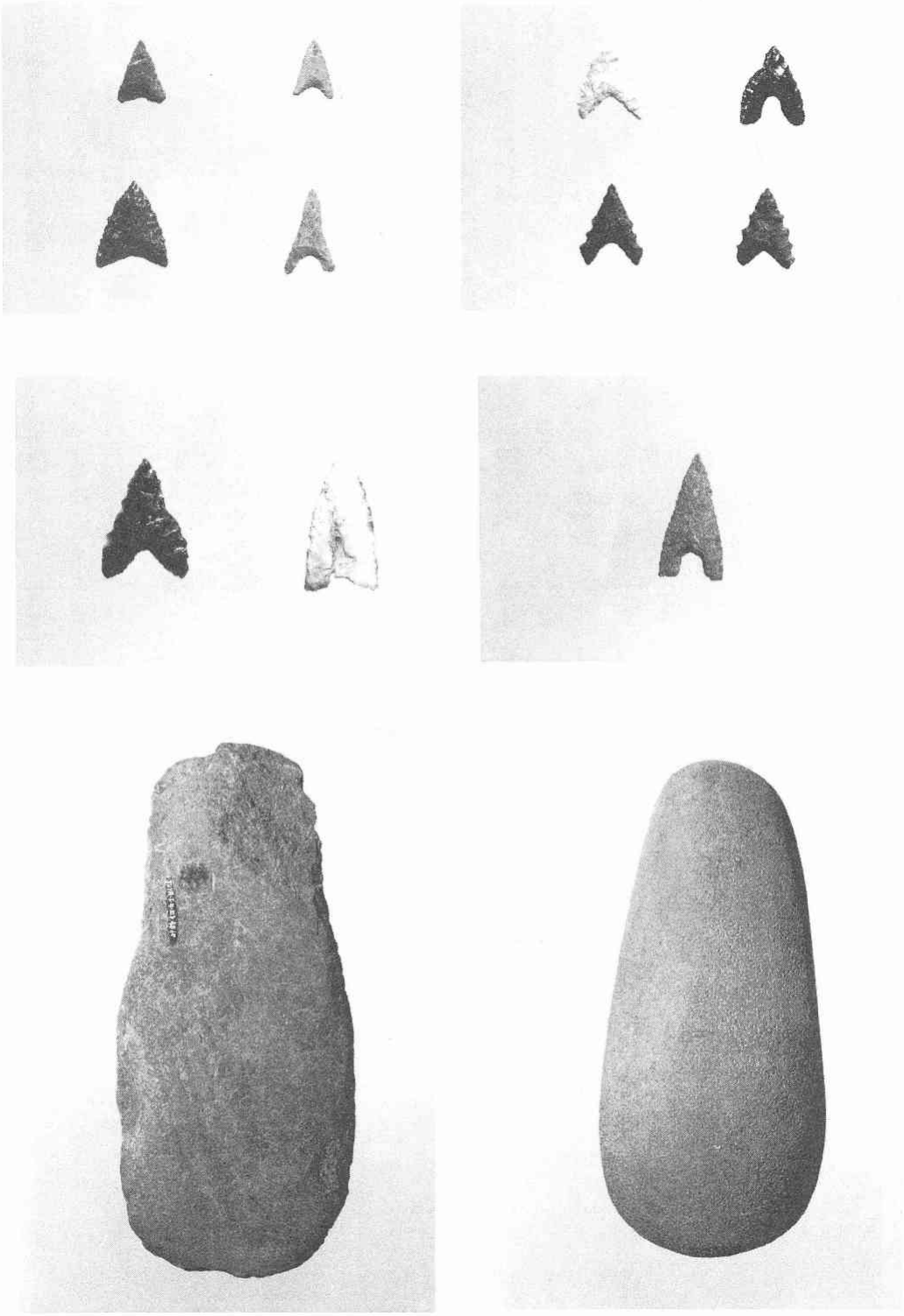
局部磨製異形石器は一点のみであるが、乳白色のチャートを使用している。形態的にみて、おそらく押型文土器に伴うものであろう。

磨石、敲石はⅢb層から五三点、Ⅲa層から二八点、Ⅱa層から十五点出土している。Ⅲb層での出土が最も多く、Ⅱa層では限定的である。形態、使用痕についてみると、Ⅲ層出土のものは小口面に敲打痕を有し、素材礫の縁辺部を集中的に使用することによって、角部をもつ形態を生み出しており、いわゆる石鹸状磨石に近い形態を呈している。Ⅱa層のものでは素材礫の形状をほとんど変えない程度の使用であり、小口面に敲打痕を有するものもないようである。Ⅲ層の段階とⅡa層の段階では、数量の違いだけでなく、使用方法においても差異が存在していた可能性が高い。なお、磨石に使用される石材は多くが遺跡周辺で産出する安山岩を使用しているようで、周辺地での採取の可能性が高い。

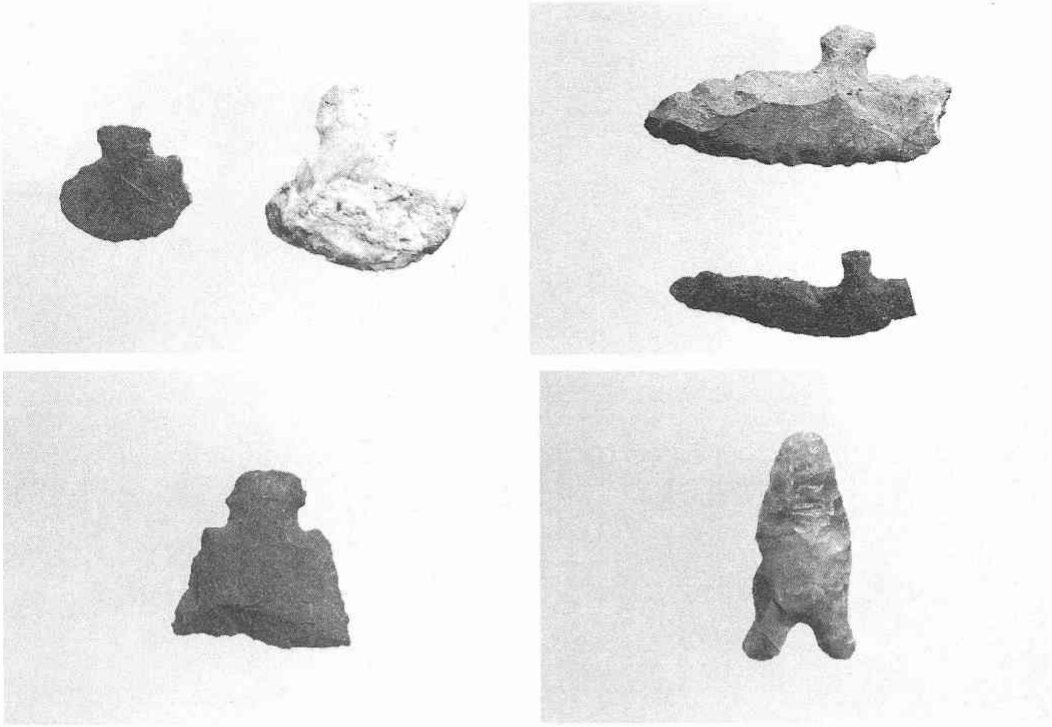
石皿は、Ⅲb層から十三点、Ⅲa層七点、Ⅱa層九点出土している。

石皿は、素材の形態を意図的な加工によって成形するものと、おそらくは原状に近い形態を残すものがあり、使用面も大きくくぼむものとほとんど変化のないものがある。使用方法の違いを反映しているものと考えてよいであろう。使用石材は磨石同様に周辺での採取が可能と考えられる安山岩ないし玄武岩を使用している。

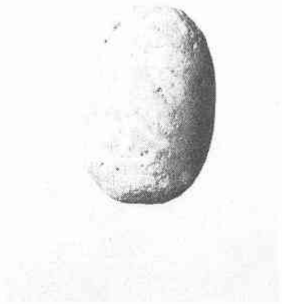
石核、剥片、砕片類がかなり多く出土している。黒曜石、安山岩、



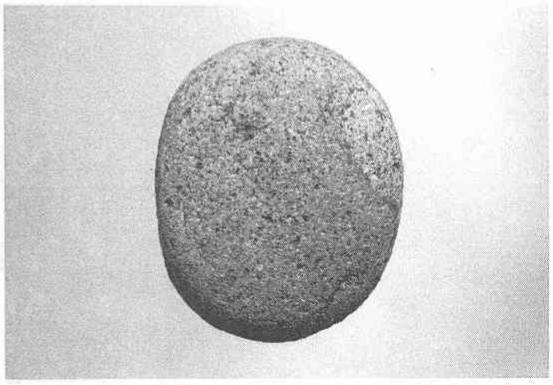
第28図　郡山町湯屋原遺跡出土の石鏃と磨製石斧



第29図　郡山町湯屋原遺跡出土の石匙とトロトロ石器（下段右）

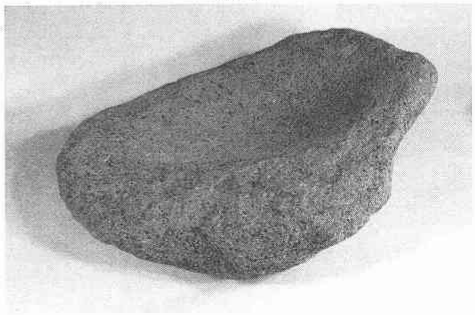


ハンマーストーン



磨石

石皿



石皿

第30図　郡山町湯屋原遺跡出土の石器

メノウなどの石材を用いた石鏃の未製品が出土している。石材の中には郡山町内では産出しない石材も見られることから、石材を他の地域から搬入し、湯屋原遺跡で石鏃や他の石器類も製作していたことを意味している。

湯屋原遺跡の弥生時代

弥生時代の遺物としては前期に属する壷および甕が一点ずつ出土している。甕は口縁部および肩部に突帯を貼りつけるもので、前期後半に位置づけられるものであろう。また、胴部外面に突帯を貼りつける壷は中期に帰属するものと考えられる。

弥生時代の遺物は少ないが、調査した範囲が限られており、今後の調査によって資料が増える可能性は高いと思われる。

湯屋原遺跡の古代・中世

古代から中世にかけての遺構・遺物として、掘立柱建物十五棟、土坑一基と須恵器、土師器、墨書土器、白磁、青磁が出土している。

掘立柱建物は大きく五群に分かれ、それぞれが数棟の掘立柱建物から構成される。これら掘立柱建物に伴うと考えられる遺物包含層がすでに削平され、古代以降の遺物の出土量は限られている。また、掘立柱建物に伴うと考えられる遺物も極めて少ないことから、それぞれの掘立柱建物の時期を特定することは困難であるが、群をなして存在する状況から、すべてが同一時期の所産ではなく、異なる時期に地点を変えながら建てられたものと推測できる。九世紀から十五世紀にかけての遺物が少量ながらも出土していることはこうした推測をある程度裏づける根拠となろう。

須恵器は、高台付坏や壷の形態から九世紀前半頃のものと考えられる。

土師器は坏の形態から九世紀前半から後半頃を中心とし、一部は一〇世紀前半にかかる時期のものと判断できる。

黒色土器は体部が丸みを帯び、高台が低いものが中心で、一〇世紀を中心とする時期のものと考えてよいであろう。

白磁は口縁部の小破片一点のみの出土であるが、一二世紀頃のものと考えられる。

青磁は一五世紀代のものと考えてよいであろう。

こうした状況からみれば、九世紀前半から連綿と湯屋原遺跡に人が居住し、その中で掘立柱建物が少しずつ地点を変えながら築かれていったと考えられる。まず、九世紀代における遺跡の性格についてであるが、墨書土器が出土していることは、その住人の性格は特定し得ないものの、識字層が含まれていた可能性を示唆しており、律令体制下に置かれた在地の有力者、あるいは、律令体制末端に位置する地域官人が湯屋原遺跡に関与していた可能性を示している。

2　常盤原遺跡

常盤原遺跡は郡山町郡山字常盤原に所在する。平成一二年一〇月七日～一〇月三〇日、県道川内郡山線道路整備（改良）工事に伴って調査された。

縄文時代早期・後期・晩期、弥生時代、古墳時代、古代にまたがる遺跡である。

主な遺構として、縄文時代晩期の集石遺構、古代の焼土遺構がある。

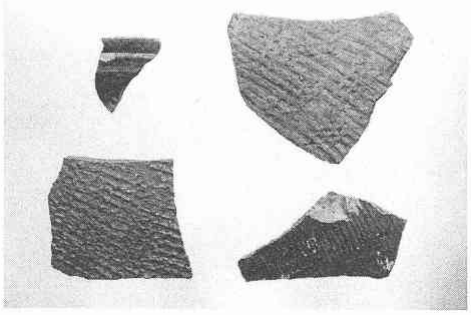
主な遺物として、縄文時代早期の吉田式土器、石坂式土器、押型文土器、円筒形条痕文土器、桑ノ丸式土器、平栫式土器、石鏃、磨石、縄文時代後期・晩期の阿高式土器、粗製深鉢土器、粗製浅鉢土器、磨石、石皿、礫石、弥生・古墳時代の成川式土器、古代の土師器甕・椀・坏、黒色土器、赤色土器、須恵器、墨書土器などが出土している。

以下、遺跡の内容について詳しく述べる事とする。

常盤原遺跡の縄文時代

Ⅲa層はアカホヤ火山灰の二次堆積腐植土であるが縄文時代中期から晩期にかけての遺物が出土している。

第31図　郡山町常盤原遺跡周辺地形



第32図郡山町常盤原遺跡出土の古代須恵器

遺構は、粗製土器を伴って集石遺構が一基検出されている。遺物は、八類から一四類までに分類した土器と磨石・石皿類の石器が出土している。

Ⅴ層は、アカホヤ火山灰（約六五〇〇年前）と薩摩火山灰（約一万一五〇〇年前）に挟まれた縄文時代早期に位置付けられる。遺構は検出されていない。

遺物は、一類から七類までに分類した土器と打製石鏃・磨石などの石器が出土している。

一類土器は吉田式土器である。胴部外面には、貝殻腹縁部による押引文を横方向へ連続的に施し、内面にはやや粗雑な仕上がりになっているがヘラ状工具によるミガキ調整を施すなど吉田式土器に多く見られる器面調整の特徴を示している。また、胎土に石英・金雲母・長石・小礫を含むが、その中でも特に長石の含有量が多いことが本遺跡の特徴である。

器形については、出土数も少なく胴部のみの出土であるため全体の器形および文様バリエーションなどの詳細は不明である。

二類土器は石坂式土器の範疇（ハンチュウ）に入るものである。石坂式土器の特徴である貝殻腹縁部による綾杉状の条痕文を施す器面調整を行っている。

三類土器は山形押型文土器である。九点出土している。湯屋原遺跡でも文様バリエーション・焼成・胎土状況が類似するものが出土しており、分布域を考える上で貴重な資料である。同様な資料は熊本県人吉市村山間谷遺跡でまとまって出土している。

四類土器は円筒形条痕文土器の範疇に入るものである。器面外面

を貝殻腹縁部によるやや斜め方向へ条痕文を施している。内面は丁寧なナデあるいはミガキ調整を施している。また、胎土には角閃石が顕著に観察できることから同種の円筒形条痕文土器の範疇で捉えることができると考えられる。

五類土器は平栫式土器の範疇に入るものである。口縁部形態に浅い波状口縁を呈し、文様バリエーションから上野原遺跡（第一〇地点）出土の平栫式C類土器に位置づけることができる。

六類土器は桑ノ丸式土器である。「口縁部は直行ないし内湾し、口縁部内面は肥厚するものが多くバケツ形の器形を呈する。口縁部文様帯を持つものと持たないものとがある。施文は短い貝殻条痕や沈線により羽状文を施すものや縦位の流水文を施すものなどがある。」とされている土器であり、本遺跡で出土した六類十器は概ね定義の範疇に入る土器である。

七類土器は胴部に棒状工具による刺突文を施すものである。

八類土器は阿高式土器の範疇に入るものである。阿高式土器の精製土器に見られるやや暗い赤褐色を呈し、いわゆる赤焼きの土器である。精製土器に多く見られる滑石粉末の混入は見られない。また、文様は胴部にY字をモチーフとした曲線文を施し、口唇部にはキザミ目を施している。

九類・一一類・一二類土器は粗製深鉢土器である。これらの粗製深鉢土器の中で九類土器は底部を欠くものの唯一全体器形を窺い知ることのできるものである。

一〇類・一三類土器は粗製浅鉢土器である。一〇類土器はボール状の粗製浅鉢土器で、放射性炭素年代分析の結果、約二八八〇年前の土器であることが判明した。この土器は黒川式土器に見られる胴部ないし底部近くで屈曲するものである。

九類～一三類土器は後期末から晩期に位置付けられる粗製土器である。通常粗製土器は精製土器とセットとして出土する例が多いが、本遺跡では精製土器の出土は見られないことから当該期の遺跡としては特異であり、今後の検討が必要と考えられる。

石器については、打製石鏃・磨石・敲石・石皿が一四点出土しているが、土器の出土数と比較すると極端に石器の出土数が少ない状況にある。また、スクレーパーや石匙といった削器・掻器類の出土は皆無である。

常盤原遺跡の弥生・古墳時代

遺構は検出されていない。遺物は、成川式土器が四点出土している。二個体の可能性が高い。頸部から口縁部などの器面調整から「中津野式」・「辻堂原式」あるいは「笹貫式」の範疇に入るものと考えられ、四世紀後半から六世紀前半に位置付けることができる。

常盤原遺跡の古代

遺構は焼土遺構を一基検出しているが、共伴した出土遺物が小片であったため時期を確定するまでに至っていない。

遺物は土師器甕・椀・坏、須恵器甕・壷、黒色土器、赤色土器、墨書土器、滑石製石鍋などが出土している。

土師器甕は、胴部から頸部にかけて内湾し、頸部から口縁部にかけて外反するものから徐々に胴部が頸部にかけて直行あるいは開い

てくるものへと移行するという特徴から九世紀中頃から九世紀後半に収まるものと考えられる。

黒色土器は、大半が九世紀中頃から一〇世紀初頭に収まるものと考えられる。

赤色土器については、高台の接合部から欠損しているものだけで明確な時期については不明である。

墨書土器が一点出土している。墨書が不明瞭なため字の解読には至っていないが、墨書土器は、平安時代、郡山地域に文字を理解する人がいた可能性と、太宰府方面との交渉があったことをうかがわせる資料である。

滑石製石鍋も出土しているが墨書土器や滑石製石鍋の出土は、郡山地域にもそれらを入手できるほどの勢力を持った有力者がいたことを推測させるものである。

3　宇都原遺跡

宇都原遺跡は郡山町嶽字宇都原に所在する。里岳の県営農免農道の整備に伴い、昭和六二年（一九八七）四月に行われた分布調査によって確認された。昭和六三年八月二二日から九月二〇日まで発掘調査を行った結果、縄文時代早期・後期・晩期の遺物が出土している。早期の土器は平栫式土器、塞ノ神式土器、条痕文土器、後期の土器は出水式土器、晩期の土器は黒川式土器であるが、粗製の深鉢形土器である。

平栫式土器は、短沈線による平行線文・刺突文・刻み目を持つ隆線文と主に胴部に押捺する縦位の結節縄文及び結束縄文を基本とする鉢形土器である。

塞ノ神式土器・条痕文土器は、三層のアカホヤ火山灰層下から出土している。口縁部に平行する条痕が横走し、さらに、その下位に直行する条痕が見られる。口唇部は平坦面をなし、直行に近い器形を呈し硬質の焼成である。この土器と類似するものが、栗野町山崎B遺跡・鹿児島市吉田町小山遺跡・志布志町鎌石橋遺跡で出土している。さらに熊本県狸谷遺跡や大分県右京西遺跡でも類似した土器群が知られており、七・八千年位前の縄文時代早期に中九州や東九州方面との広い範囲にわたって交流が行われていたことをうかがわせる。

ススが付着している土器が出土しており、当時の食生活（煮炊き）の有様がうかがえる資料である。

石器は磨石・敲石・ハンマー、石材は頁岩・黒曜石の剥片などが出土している。

石皿は木の実をすりつぶすのに使用される道具であり、黒曜石の破片は石鏃などの製作が行われていたことをうかがわせるものである。

なお、宇都原台地の谷部を除く畑地には、古代人の貴重な遺産が埋もれている可能性が高い。

4　油須木城跡

郡山町油須木字上ノ原一五八二番地ほかに所在する。民間宅地造成に伴う事前調査として、第一次確認調査を平成一四年（二〇〇二）五月七日～六月二五日、第二次調査を同年九月九日～九月二四日、

全面調査を同年一〇月七日～一〇月二五日に実施している。

油須木城は標高二〇〇～二二四メートル前後の舌状台地に大小十一からなる曲輪で構成された中世山城で現在でも堀切や空堀、切岸や虎口が確認できる、小規模ではあるが残りのよい山城である。主な遺構として小溝・掘り込み・柵列・柱穴・土坑・空堀などが検出されている。主な遺物としては、中世土師器、龍泉窯系青磁、白磁、備前焼などが出土しているが、特に注目されるのはタイのメナムノイ川窯産黒褐釉四耳壺が出土していることである。

第六章　郡山町および周辺の古代・中世

平安・鎌倉時代を中心とする古代・中世の遺物として、須恵器甕・壷、土師器甕・椀・坏、黒色土器、赤色土器、墨書土器、滑石製石鍋、青磁、白磁、陶磁器などが出土している。それらの中で特に注目される遺物は、墨書土器、滑石製石鍋、青磁、白磁、陶磁器である。

1　墨書土器

墨書土器は先に述べたように郡山町内では湯屋原遺跡、常盤原遺跡などで出土しているが、隣接する伊集院町、市来町からも出土している。市来町では市ノ原遺跡第一地点で、厨（くりや）の墨書土器が出土し、安茶ケ原遺跡では、土坑に埋納された須恵器の坏の底部に「日置厨」の墨書のあるものが発見されている。市ノ原遺跡第一地点の墨書土器（厨）と相関関係がありそうである。伊集院町下永迫A遺跡からも墨書土器が出土している。

郡山町湯屋原遺跡で、平安時代以降の掘立柱建物十五棟が検出されている。東市来町市ノ原遺跡では、平安時代前期の掘立柱建物跡が発見されている。掘建柱建物はこれらを構築できる有力者が存在していたことを意味している。墨書土器とも関連があると思われる。おそくとも平安時代には、これらの地域は太宰府方面と密接なかかわりを持っていたことが考えられる。

2　滑石製石鍋

滑石製石鍋は南九州では十二世紀を境に流通量が増加するとされることから、時期については十二世紀初頭と考えられる。滑石製石鍋は長崎県西彼杵半島に原産地がある。十二世紀から十三世紀にかけて、奄美・沖縄諸島まで広く分布しており、西北九州と南島との遠隔地間の交流が盛んであったことを裏付ける資料である。

3　青磁、白磁、陶磁器

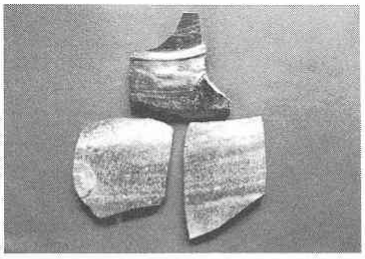
郡山町および近隣から中国、東南アジア産の青磁、白磁、陶磁器などが出土している。

郡山町の地頭仮屋跡からは東南アジアのタイ産の陶器が出土している。鹿児島県内で東南アジア産の陶磁器が出土している遺跡は、姶良郡隼人町にある鹿児島神宮の別当寺である弥勒院遺跡（宮内小学校敷地内）からタイ産の壺が、鹿児島神宮の四社家であった桑幡氏館跡からマルタバンの壺といわれる東南アジア系の焼き物やベトナムの陶器が発見されている。川辺郡坊津町泊浜からはマルタバン

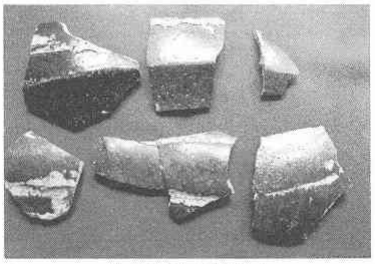
壺の貼付け龍文の破片や、一四～一五世紀のベトナム産菊花文鉄絵などが採集されている。川辺郡知覧町の知覧城からも一六世紀代のタイ産陶器が出土している。鹿児島県内のものは、出土資料から見て十六世紀から一七世紀にかけてのころに、最も盛んに東南アジアとの交易を行っていたようである。

鹿児島神宮、坊津、知覧は良港を抱えていることはよく知られていることであるが、何故、内陸部に位置している郡山町からタイ産の陶器が出土したのであろうか。このほかにもやはり、内陸部に位置している大口の平泉城跡からも出土している。

伊集院町一宇治城跡からは、青磁・白磁・土師器・すり鉢・火鉢などが出土している。とくに中国陶磁器がかなり多く出土している。遺物を調査した亀井明徳教授（専修大学）によれば、中国製白磁、青磁、青花、黒釉・褐釉陶器のほか、朝鮮（李朝）陶磁が少数ふくまれ、その大多数は一四世紀後半から一六世紀中葉の間におさまり、一部に十三世紀代の中国陶磁器もふくまれているという。



油須木城跡出土



地頭仮屋跡出土

第33図　郡山町出土の東南アジア（タイ）産陶器

第34図　郡山町油須木城跡出土の備前焼片口擂鉢

この時期には、国内産よりも海外からの貿易陶磁器が過半数を占めている。

中国陶磁器を時期的にみると十四世紀後半から一五世紀中葉に属する青磁が最も多く、この時期に陶磁器の搬入が最も盛行していたようである。この時期の中国陶磁器の種類は、沖縄・奄美諸島のグスクや貝塚等から出土する中国陶磁器と類似するものが多く、入手経路として、琉球による対明貿易と薩摩への交易によるものであろうとしている。

室町時代から江戸時代にかけて、鎖国前夜の薩摩藩の海外交易活動はどのようなものであったのか、交易品は何であったのか興味深い。

《主な参考文献》

出口　浩・岡元満子ほか『掃除山遺跡』、鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（一二）、一九九二
指宿市考古博物館・時遊館ＣＯＣＣＯはしむれ、第六回「ドキドキ縄文さきがけ展」図録、一九九九
池水寛治　「先史時代」『出水郷土誌』、一九六八
伊集院町教育委員会『稲荷原遺跡』伊集院町埋蔵文化財発掘調査報告書（一〇）、一九九八
鹿児島県立埋蔵文化財センター　「上野原遺跡　国分上野原テクノ

パーク第四工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」
鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（二三）、一九九七
鹿児島県立埋蔵文化財センター　「特殊な土製品・石製品出土　市ノ原遺跡（第五地点）」『埋文だより　第一六号』、一九九八
鹿児島県立埋蔵文化財センター　「竹ノ山A・B遺跡」鹿児島県埋蔵文化財センター発掘調査報告書（二九）、二〇〇
鹿児島市教育委員会　「草野貝塚」『鹿児島埋蔵文化財発掘調査報告書』（九）　一九八八
上村俊雄「隼人の考古学」『考古学ライブラリー』三〇　ニュー・サイエンス社　一九八四
上村俊雄「歴史の焦点　鹿児島県国分市上野原遺跡」『歴史と地理』、五一四、山川出版社　一九八八
河口貞徳「山ノ口遺跡」『鹿児島県文化財調査報告書』（七）、一九六〇
河口貞徳「鹿児島県高橋貝塚」『考古学集刊』第三巻第二号　東京考古学会編　一九六五
河口貞徳「鹿児島県上加世田遺跡」『考古学ジャーナル』第三〇号、ニューサイエンス社、一九六九
河口貞徳・河野治雄・池水寛治・上村俊雄・林敬二郎・出口　浩「永山遺跡」『鹿児島考古』　第八号、一九七三
河口貞徳　「日本の古代遺跡」38『鹿児島』保育社　一九八八
倉元良文・堂込秀人編『横峰遺跡』南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書（四）一九九三
考古学フオーラム・イン鹿児島実行委員会、『日本の夜明け鹿児島の縄文文化』　一九九四
郡山町教育委員会「宇都原遺跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（1）一九八九
郡山町教育委員会「湯屋原遺跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（2）二〇〇三
郡山町教育委員会「常盤原遺跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（3）二〇〇三
郡山町教育委員会「油須木城跡」『郡山町埋蔵文化財発掘調査報告書』（4）二〇〇四
町田　洋　『火山灰は語る』　蒼樹書房、一九七七
町田　洋・新井房夫「広域に分布する火山灰・姶良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』　四六、一九七六
町田　洋・新井房夫「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ・アカホヤ火山灰」『第四紀研究』一七、一九七八
弥栄久志ほか『上野原遺跡』、鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書、二三、一九九七
宮田栄二・児玉健一郎ほか『旧石器から縄文へ　鹿児島県考古学会・宮崎県考古学会合同研究大会　資料集』、一九九五
宮田栄二「鹿児島県日置郡松元町仁田尾遺跡」『日本考古学年報』（四七）、日本考古学会、一九九六
森脇　広　二〇〇〇　縄文時代早期・草創期の南九州の自然環境
黎明館企画展　『縄文のあけぼの＝南九州に花開いた草

創期文化』鹿児島県歴史資料センター黎明館

中村耕治「鹿児島県国分市上野原遺跡跡」『日本考古学年報四六』（一九九三年度版）　日本考古学協会　一九九五

中山清美・田村晃一ほか「喜子川遺跡　第一次・第二次発掘調査報告書」『青山考古』（七）一九八九

瀬戸口望　「東黒土田遺跡発掘調査報告」『鹿児島考古』（十五）、一九八一

新東晃一　「火山灰からみた南九州縄文早・前期土器の様相」『鏡山猛先生古稀記念古文化論攷』鏡山猛先生古稀記念論文集刊行会、一九八〇

諏訪昭千代・青崎和憲「花ノ木遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』（一）、一九七五

田村晃一・池田　治「喜子川遺跡　第三次・第四次発掘調査報告」『青山史学』（一四）　一九九五

上東克彦ほか、『栫ノ原遺跡』加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書、（十五）一九九八

以上のほか、主として二〇〇〇年度から二〇〇〇年度までに発行された、日本考古学年報（日本考古学協会）、『発掘された日本列島新発見考古速報』【文化庁】朝日新聞社、『鹿児島考古』（鹿児島県考古学会）、鹿児島県立埋蔵文化財センター・市・町・村の発掘調査報告書、「埋文だより」、「現地説明会資料」などを参考にした。

《コラム》　南九州の古人骨

鹿児島女子短期大学　竹中　正巳

幸運が重なれば、古人骨からたくさんの情報を引き出せる。保存の悪いものより、骨格が完全にそろっていて保存状態のよい資料の方が、当然ではあるがたくさんの情報を我々に与えてくれる。性別や年齢、顔立ちや体つき、生業や習慣的姿勢、骨折をはじめとする疾患歴、発育不全や栄養状態、出産歴、食べ物、死亡原因、埋葬方法、生存年代、ＤＮＡ、血縁関係などを明らかにできる。火葬骨であっても、性、年齢、体格のほか、どれくらいの温度で焼かれたのか、軟部の残る遺体が焼かれたのか、白骨化した骨が焼かれたのかなどを明らかにできる。また発掘調査の際、作業の進展に応じ解明可能な事柄を見極め、それに関する出土情報を発掘現場からできるだけたくさん収集できれば、単に人骨のみから復元できる情報を越えた埋葬過程や埋葬儀礼などの詳細な復元ができる場合もある。

南九州から出土した古人骨は少ない。旧石器から近世までの各時代で、古人骨資料がある程度の数出土しているのは、古墳時代と近世だけである。したがって、現在のところ南九州の人類史の復元が、古人骨から詳細に行える状況にはまだない。本稿では、現在までに出土した古人骨をもとに、各時代に生活した南九州の人々の様相を概説する。

旧石器時代の人骨は、南九州では出土していない。縄文時代の人骨も、出水貝塚（縄文時代中期、鹿児島県出水市）、市来貝塚（縄文時代後期、鹿児島県いちき串木野市）、柊原貝塚（後・晩期、鹿児島県垂水市）などから、十数体が出土しているに過ぎない。南九州の縄文人は、基本的には日本列島本土の縄文人と同様の身体特徴を持っている。例えば脳頭蓋のサイズが大きく、高さが低い。また、顔面の幅が大きく、高さが低い。咬合が鉗子状。上腕に対して前腕が、大腿に対して下腿が相対的に長い。大腿骨は柱状性が強く、脛骨は扁平などの特徴が共通している。また、日本列島では縄文時代後期から晩期にかけて、風習的抜歯が盛んに行われた。南九州でも、柊原貝塚の出土例から、縄文後期には西日本型式の抜歯風習が伝わって来ていたことが明らかになっている。

弥生時代は、稲作や金属器の使用などを特徴とする文化が形成された。アジア大陸（現在の中国や朝鮮半島地域）から、日本列島に渡来民が渡って来て、彼らの遺伝的影響が弥生文化の波及とともに日本列島各地に広がっていった時代である。渡来人の子孫が渡来系弥生人と呼ばれる人々であり、顔が高く平坦で、高身長の特徴を持つ。弥生文化が及んだ地域では縄文時代に比べると生活が一変した。

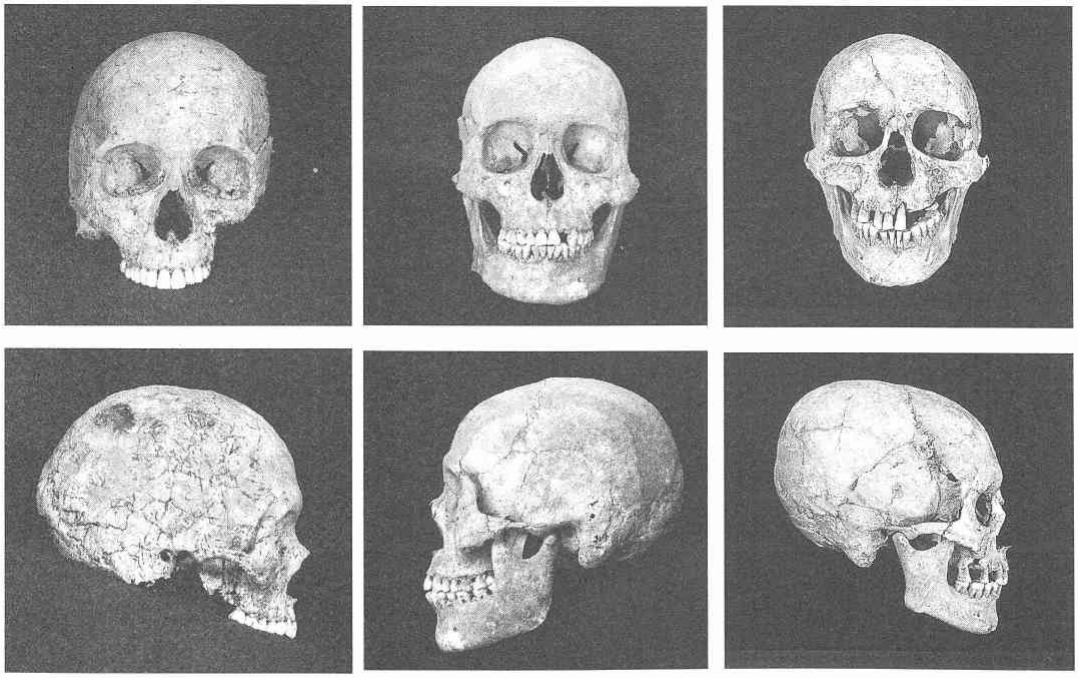
南九州本土では、弥生時代の人骨はほとんど出土していない。下小路遺跡甕棺墓（鹿児島県南さつま市）や弥生から古墳時代にかけて営まれた成川遺跡（鹿児島県指宿市）から出土しているだけである。甕棺墓は北部九州の弥生時代に盛行した墓制である。下小路に埋葬された人がどのような形質を持ち、どのような生活を営んだ人であったのか興味が持たれるところではあるが、下小路人骨は断片のみしか遺存しておらず、その詳細は不明である。成川遺跡出土人骨も保存状態はよくないが、短頭・低顔・低身長の特徴を持ち、弥

生〜古墳時代併行期の南西諸島から出土する人骨と同様の形質を持つとされている。

南九州の古墳時代人骨は、南九州の東半分で地下式横穴墓という、地下に玄室空間が保持されることが多い墓制が営まれたこともあり、保存状態のよい人骨が多数出土している。しかし、地下式横穴墓分布域でも、人骨出土数の偏りは著しく、えびの市や小林市など南九州の山間部で多数の人骨が出土し、宮崎平野部や大隅半島平野部で少ない。山間部の地下式横穴墓から出土する人骨は縄文人的な身体特徴を持ち、宮崎平野部から出土する人骨は渡来系弥生人と類似する特徴をもつ人々も居住していたことが知られている。

近年、宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群の研究が行われ、出土した人骨等から、様々なことが明らかにされた。まず、古墳時代後期の南九州の山間部（島内地下式横穴墓群）に、渡来系弥生人の遺伝子をある程度受けた人々が生活していたと考えられること。遺存していた糞石の分析から、アブラナ科、イネ科、アカザ科、ヒユ科、ヨモギ属などの野菜類や薬用植物が食べられていた可能性が推測されたこと。上顎前歯舌側面に特殊磨耗（LSAMAT:Lingual Surface Attrition of Maxillary Anterior Teeth）が認められる男性壮年人骨の出土から、食事や作業の際に、上顎歯・硬口蓋と舌との間に植物などを挟み、舌や手を使い、それらを押し引きし、しごく行為を行っていたことが推測されたことなどである。

奈良時代以降になると、南九州でも火葬が行われるようになり、越ノ巣火葬墓（奈良時代、鹿児島県薩摩川内市）、小中原遺跡（中世、鹿児島県南さつま市）、横尾原遺跡火葬墓（中世、宮崎県都城



江戸時代人骨頭蓋
原村Ⅱ遺跡３号墓人骨（男性・壮年）
鹿児島県曽於市出土

古墳時代人骨頭蓋
常心原地下式横穴墓群５号墓２号人骨（男性・壮年）
宮崎県西都市出土

縄文時代人骨頭蓋
柊原貝塚95-2号墓人骨（男性・熟年）
鹿児島県垂水市出土

市）などで火葬骨が出土している。

中世以降、土葬もまた盛んに行われた。中世では、向栫城跡（鹿児島県日置市）などで、人骨が出土している。近世では、松之尾遺跡（鹿児島県枕崎市）、王城古墓（近世、鹿児島県大口市）、稲村城跡（鹿児島県鹿屋市）、前畑遺跡（鹿児島県鹿屋市）、原村Ⅱ遺跡（鹿児島県曽於市）、貴船寺跡（宮崎県都城市）などから、人骨が出土している。

南九州の近世人骨の特徴としては顕著な長頭性があげられる。北部九州などでも、このような傾向にあることは既に指摘されている。南九州では、江戸時代の長頭から一転して、明治時代以降は著しい短頭性を示す。南九州の近代の急激な短頭化が、どのような要因によるのか解明が待たれる。